



アール・ブリュット 2022巡回展 かわるかたち いろいろな素材、さまざまな表現
Art Brut 2022 Touring Exhibition Form, Fluid and Flexible — Varied Materials, Diverse Expression

アール・ブリュット 2022 巡回展

かわるかたち

いろいろな素材、さまざまな表現

Art Brut 2022 Touring Exhibition Form, Fluid and Flexible
————— *Varied Materials, Diverse Expression*

アール・ブリュット 2022 巡回展

かわるかたち いろいろな素材、さまざまな表現

*Art Brut 2022 Touring Exhibition Form, Fluid and Flexible
Varied Materials, Diverse Expression*

【第1会場】東京都渋谷公園通りギャラリー 7月16日(土) - 9月25日(日)
【第2会場】練馬区立美術館 区民ギャラリー 10月27日(木) - 11月2日(水)
【第3会場】府中市美術館 市民ギャラリー 11月25日(金) - 12月4日(日)
【出張イベント】八丈町多目的ホールおじゃれ 8月2日(火)

Venue 1: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery Jul.16(Sat.) - Sep.25(Sun.), 2022

Venue 2: Nerima Art Museum(Civic Art Gallery) Oct.27(Thu.) - Nov.2(Wed.)

Venue 3: Fuchu Art Museum(Citizen's Gallery) Nov.25(Fri.) - Dec.4(Sun.)

Special event: Hachijo-machi Multipurpose Hall Ojare Aug.2(Tue)

主催：東京都、東京都渋谷公園通りギャラリー（公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館）
協賛：練馬区 協力：府中市、八丈町

Organized by the Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Supported by Nerima City Cooperated by Fuchu City, Hachijo Town

ごあいさつ

この度、東京都と東京都渋谷公園通りギャラリーは、アール・ブリュット* 2022 巡回展「かわるかたち」を開催いたします。

本展では、都内3カ所で開催する展覧会と、島しょ部への出張イベントを通して、国内外で活躍の場を広げる10名の作家を紹介し、絵画や立体など、形状の異なる様々な作品から、身近な素材でつくられる多様な表現のかたちと、そこに宿る創造の根源的な魅力に迫ります。

「かたち」という言葉は、姿や形状、図柄などのほか、ものごとの様子や状態を表す時にも使われ、〈形〉〈容〉〈象〉〈貌〉などの漢字で書き表されるように、多様な意味合いを持っています。本展で紹介するのは、この「かたち」という言葉のように、印象の異なる様々な表現です。繰り返し描かれるシンプルで力強いかたちや、繊細なドローイングの線などに見られるモチーフの捉え方などには、作家それぞれに特徴があり、どれも独創的です。

また、つくり手の日常と深い関わりがある素材が日頃とは異なる表情を持つ驚きは、技法を超えたところにある表現の多様さを感じさせるとともに、つくり手にとって創作と日常とが切り離せないものであることにも改めて気づかせてくれます。

本展を通じ、アール・ブリュットをプラットフォームとした芸術文化の可能性や、人間の表現に対する根源的欲求への問いが、多角的かつ鮮やかに浮かび上がってくことを願います。

最後になりますが、本展開催にあたり、貴重な作品をご出展いただきました作家の皆様、多大なご協力を賜りました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

*アール・ブリュット(ArtBrut)は、元々、フランスの芸術家ジャン・デュビュッフェによって提唱されたことばです。今日では、広く、専門的な美術の教育を受けていない人などによる、独自の発想や表現方法が注目されるアートを表します。

2022年7月
主催者

凡例

作家・作品解説の執筆者は、各文末にイニシャルで記した。

【K】 河原功也（東京都渋谷公園通りギャラリー）

【M】 門あすか（東京都渋谷公園通りギャラリー）

【Y】 吉田有里（東京都渋谷公園通りギャラリー）

作品の情報は、作家名、作品名、制作年、材質／技法、
サイズ（縦・高さ×横・幅×奥行、cm）、所蔵先の順で記載した。

作品の情報は、東京都渋谷公園通りギャラリーの調査したデータに加え、
作家と所蔵者から提供されたデータを参照した。

クレジットは、巻末に記載した。

Notes

Catalogue entries are followed by the author's initials, as follows:

【K】 KAWAHARA Koya (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

【M】 MON Asuka (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

【Y】 YOSHIDA Yuri (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

For each artwork, the information is given in the following order:
Artist Name, Title, Date, Materials, Size (height×width×depth, cm), and Collection.

Information on the artworks is based on the data provided by the artist and the collector,
in addition to the data researched by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.

Credits are listed at the end of the report.

謝辞

本展覧会の開催にあたり
ご協力を賜りました下記の関係者の皆様をはじめ
お名前を記すことのできなかった多くの皆様に
心よりお礼申し上げます。
（順不同／敬称略）

青木 尊

五十嵐 朋之

稲田 萌子

井上 優

佐々木 早苗

萩尾 俊雄

濱中 徹

本田 雅啓

吉川 秀昭

渡邊 あや

青木 武夫

萩尾 弘子

横井 悠

医療法人清明会 障害福祉サービス事業所 PICFA
きょうと障害者文化芸術推進機構 art space co-jin
社会福祉法人安積愛育園 はじまりの美術館
社会福祉法人光林会 るんびにい美術館
社会福祉法人みぬま福祉会 川口太陽の家 工房集
社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房
特定非営利活動法人 La Mano クラフト工房 La Mano

練馬区立美術館

府中市美術館

八丈島文化協会

「かわるかたち」をふりかえる 門あすか（東京都渋谷公園通りギャラリー 学芸員）

はじめに

本展は、東京都と東京都渋谷公園通りギャラリー（以下、「当ギャラリー」）が、アール・ブリュット¹を都内で広く紹介することを目的として、2020年と2021年に行ったアール・ブリュット特別展²の流れを汲む事業である。本年度からは、シリーズ名をアール・ブリュット巡回展として、2022年4月にプレイベント「本田まさはるさんと、街ぶらライブペインティング」を開催した後、7月より展覧会を当ギャラリー、練馬区立美術館区民ギャラリー及び府中市美術館市民ギャラリーにて、8月には出張イベント「アール・ブリュットってなんだろう&オンライン・ツアー」を八丈町多目的ホールおじゃれにて実施し、2022年12月に全体会期を閉幕した。

本展では、近年「日本のアール・ブリュット」として海外での展覧会に招聘された作家を含む、国内外で活躍する10名の作家を紹介した。テーマは、「かたち」と「かわる」をキーワードに、つくり手によって身近な素材がかたちを変える面白さと、作品との出会いからおこる、私たちの心の中の変化を見つめることとした。そして、展覧会を通してアール・ブリュットを紹介するにあたり、来場者がじっくりと作品と向き合うことができるよう、展示室には、順路を設けず、すべての作品を同時代の表現として受け入れることのできる場となるよう心掛けた。

かたちから見える多様性

かたちという言葉は、生活のいろいろな場面で使われている。姿や形状、図柄など物質性を伴うものだけではなく、ものごとの様子や状態など観念的なことを言い表す時にも使われる、多様な意味合いを持つ言葉である。そのため、抱くイメージは一人ひとりに違いがあり、多くの作品と出会うことで、個々の内面にあるイメージもまた変化するのではないかと考えた。

出展作品を選ぶにあたっては、独創的な造形であることの他に、創作の方法や表現するに至った経緯など、バックグラウンドの多様さも意識するようにした。また、制作方法等でカテゴライズすることの難しいアール・ブリュットにおいて、表現の広がりを感じるためには、一人の作家についてなるべく多くの作例を目の当たりにできるようにしたいと思った。このようにして、つくり手とそこに表された想いを辿りながら作品を選んだ結果、非常に多彩な展示内容となった。

本展では、色鉛筆やカラーペン、布、糸、チラシといった身近な素材を用いた平面や立体など、形状の異なる作品が多く見られる。手に入りやすい素材や馴染み深いモチーフが選ばれる傾向は、アール・ブリュットの特徴のひとつである。また、つくり手による意図的な創作ではない場合もある等、創作を始めたきっかけや、活動の場や制作・発表歴も、実に様々である。なぜその素材でつくるのか、何をつくるのかの理由には、つくり手の日常が色濃く映り込んでいる。作品は、どれもつくり手の想いや行為、そこに費やされた時間がかたちとなった表現の痕跡である。

この本来ごく個人的なものであるはずの創作の理由を、私たちは、作品を通して見ているのだが、不思議と人が生きるといふ普遍的な出来事を見ているような気持ちになるのは、なぜだろうか。

それぞれのかたちと、かわる展示空間

ここからは、10名の出展作家と作品及び展示空間について述べる。作品は、本展のメインビジュアル³を構成する色面がプリントされたパネルを背景に展示した。色面は、展示台やケースの側面にも広がっている。これは、3つの展示会場を巡回するにあたり、共通したイメージで展示室をしつらえる工夫⁴であり、個々の作品と会場全体とをコラボレーションさせる試みである。さらに、第1会場の当ギャラリーでは、作品の配置にも、対比や緩やかな関連性をもたせた。

当ギャラリーの展示室は、大小2室に分かれている。小さな展示室には、壁の一方に幅4メートルの大きなキャンバスを掛け、対面する壁には、その絵の制作の様子を伝える映像のモニターと数点の絵画、部屋の中央には、立体作品を設置した⁵。キャンバスは、プレイベントとして当ギャラリーの交流スペースで行った公開制作／ワークショップにおいて、本田雅啓が、渋谷の街を歩いて見たこと感じたことを一般の参加者と共に描いた作品である。制作には、幼児から大人まで約80名が入れ替わりながら参加し、本田は、その複数の人の手による筆跡を活かしながら、筆や刷毛、ローラーなどを使い、ペンキで色を塗り重ねていった。従来の本田の作風では、偶然を取り入れつつも、自身のルールで塗り替え、幾何学模様のように線と面とを規則正しく構成して世界を作り上げる。しかし、この作品には、画面の左端に、参加者によりモチーフの輪郭線が塗りつぶされた、不規則で大きな色面が残されている。全体的な調和を考えると異質な感じのするこの部分は、あえて残されたことで、スクラップ＆ビルドを繰り返す渋谷の街の雰囲気伝える味わい深い要素となっている。同じ時間と場所を共有しながら行うワークショップだからこそ生まれたリアリティのある表現だ。展覧会会場で配布したアンケートには、完成した作品と記録の映像作品⁶とを合わせて見ることで、次々と変化する制作の様子を知ることができてよかったという回答が複数あった。一方、萩尾俊雄の創作は、自身の楽しみに熱中することで磨かれてきた表現である。戦わせて遊ぶために次々と作り出される怪物が、心棒もなく、チラシとセロハンテープだけでできていることには驚くばかりである。怪物は、躍動の瞬間を切り取ったかのようなしなやかさで、かたちづくられている。

大きな展示室の入り口は、濱中徹の作品と作品の間を抜けて奥へと進むようになっている。濱中は、60代後半に注目されるまで、身近な事物をテーマに想像の物語を1枚の絵にする独自の手法で、コツコツと創作を続けてきた。道端で拾ったナットを虫に見立てたり、曲線をつないで描いた花のかたちを歯車に見立てたり、繰り返すかたちはイマジネーションにより命を吹き込まれ、絵の中で静かな時を生きている。続いて、30年以上もの長い間、「目・目・鼻・口」のかたちを繰り返し描き続けてきた吉川秀昭の作品は、陶土の立体とペン画を展示した。モノクロームのシンプルな表現だが、実に長い時が詰まっている。濱中の裏面には、渡邊あやの飛行機と、特定の街の名所や名物など実在のモチーフを独創的にコラージュして描く作品が続き、吉川の裏面には、稲田萌子の色鉛筆の作品が掛かる。渡邊と稲田の色鉛筆で描かれた作品は、隣り合うように配した。その奥には、五十嵐朋之の刺繍やペンのドローイングのエリアがある。細部まで観察され、優れた技巧で描かれるリアルな虫が手を取り合ってダンスを踊る情景や添えられた文字がユニークな五十嵐ワールドに没入できる。様々な手法を用いる佐々木早苗にも、刺繍の作品がある。佐々木は、ペンで描く図柄も、刺繍のステッチも、短いタッチを繰り返している。井上優も、大胆に輪郭線を描

いた後は、鉛筆の短いタッチで画面を塗りこめていく。井上が描き始めたのは、70代からだ。背中合わせに展示される濱中と注目された年齢は近いが、表現は全く対極で、大胆さが魅力である。井上と向かい合う青木尊とは大胆な構図が共通する。対象の気になる部分をクローズアップして描く青木の絵は、つくり手の強い想いが、作品を魅力的にするテクニックのひとつになり得ると感じさせてくれる。逆に、稲田、佐々木、吉川の作品に共通していると感じるのは、何か具体的な結末を目指して描くことだけが創作ではないという点である。稲田自身にとって心地よい感覚、物と物とを触れ合わせる感触が、結果的に、稲田にしか描けない不思議な円環となって現れている。このことは、鑑賞とは、何が描かれているのか、なぜ描くのかを読み解くだけの行為ではなく、作品を前に、私たちがどう感じるのかが重要だと気付かせてくれる。

おわりに

以上のように、本展では、様々な動機で創作する、いろいろな地域のつくり手による、多様な表現の作品を紹介した。第2会場、第3会場へと巡回して、会場内の配置が換わる毎に作品の印象が変わる様子も、巡回展ならではの体験となった。アンケートの回答には、作家や作品名を示しながら感動した点を具体的に伝える記述が多く見られた。作家のこだわりや想いが、作品それぞれの魅力のひとつとなり、鑑賞者にも映り込んだことが窺える。これは、従来から美術全般に備わる特性だが、アール・ブリュットは、特に、様々な違いを引き受け、包摂することができる受け皿のひとつと言えるだろう。これからも、当ギャラリーの展示室が、いつでも作品と出会える場であり、私たちがよりよく生きる拠り所のひとつとなることができれば幸いである。

1 本カタログp.3参照。

2 「アール・ブリュット2020 特別展『満天の星に、創造の原石たちも輝くーカフル ガフル ヒロガル セカイー』2020年、
「アール・ブリュット2021 特別展『アンフレームドー創造は無限を羽ばたいてゆくー』2021年。会場、会期等は、当
ギャラリーウェブサイト (<https://inclusion-art.jp/>)を参照。

3 図 p.9 「かわる」「かたち」の文字を重ねた時に交わる部分を抜き出し、カラフルな色面として構成した、本展の
コンセプトをあらわすイメージ(デザイン:IO inc.)。会場毎に、作品とデザインが交わり、かたちをかえながらコラ
ボレーションする展示空間を創出した。

4 パネルを垂木で組んだ枠と組み合わせることでフレキシブルな構成を可能としたこのシステムは、会場構成を担っ
たHIGUREI7-I5 cas とnmstudioの提案による。

5 図 p.52-54。

6 ドキュメンタリー・ムービー「シブヤノマチナミ」クレジットは、本カタログp.68に所収。



いた後は、鉛筆の短いタッチで画面を塗りこめていく。井上が描き始めたのは、70代からだ。背中合わせに展示される濱中と注目された年齢は近いが、表現は全く対極で、大胆さが魅力である。井上と向かい合う青木尊とは大胆な構図が共通する。対象の気になる部分をクローズアップして描く青木の絵は、つくり手の強い想いが、作品を魅力的にするテクニックのひとつになり得ると感じさせてくれる。逆に、稲田、佐々木、吉川の作品に共通していると感じるのは、何か具体的な結末を目指して描くことだけが創作ではないという点である。稲田自身にとって心地よい感覚、物と物とを触れ合わせる感触が、結果的に、稲田にしか描けない不思議な円環となって現れている。このことは、鑑賞とは、何が描かれているのか、なぜ描くのかを読み解くだけの行為ではなく、作品を前に、私たちがどう感じるのかが重要だと気付かせてくれる。

おわりに

以上のように、本展では、様々な動機で創作する、いろいろな地域のつくり手による、多様な表現の作品を紹介した。第2会場、第3会場へと巡回して、会場内の配置が換わる毎に作品の印象が変わる様子も、巡回展ならではの体験となった。アンケートの回答には、作家や作品名を示しながら感動した点を具体的に伝える記述が多く見られた。作家のこだわりや想いが、作品それぞれの魅力のひとつとなり、鑑賞者にも映り込んだことが窺える。これは、従来から美術全般に備わる特性だが、アール・ブリュットは、特に、様々な違いを引き受け、包摂することができる受け皿のひとつと言えるだろう。これからも、当ギャラリーの展示室が、いつでも作品と出会える場であり、私たちがよりよく生きる拠り所のひとつとなることができれば幸いである。

1 本カタログp.3参照。

2 「アール・ブリュット2020 特別展『満天の星に、創造の原石たちも輝くーカフル ガフル ヒロガル セカイー』2020年、
「アール・ブリュット2021 特別展『アンフレームドー創造は無限を羽ばたいてゆくー』2021年。会場、会期等は、当
ギャラリーウェブサイト (<https://inclusion-art.jp/>)を参照。

3 図 p.9 「かわる」「かたち」の文字を重ねた時に交わる部分を抜き出し、カラフルな色面として構成した、本展の
コンセプトをあらわすイメージ(デザイン:IO inc.)。会場毎に、作品とデザインが交わり、かたちをかえながらコラ
ボレーションする展示空間を創出した。

4 パネルを垂木で組んだ枠と組み合わせることでフレキシブルな構成を可能としたこのシステムは、会場構成を担っ
たHIGUREI7-I5 cas とnmstudioの提案による。

5 図 p.52-54。

6 ドキュメンタリー・ムービー「シブヤノマチナミ」クレジットは、本カタログp.68に所収。



アール・ブリュット 2022 巡回展

かわるかたち

いろいろな素材、さまざまな表現
Art Brut 2022 Touring Exhibition *Form, Fluid and Flexible*
Varied Materials, Diverse Expression

東京都渋谷公園通りギャラリー
7月16日(土) - 9月25日(日)

青木 孝
AOKI Takao
五十嵐 寛之
IKIHARA Hiroyuki
堀田 龍子
HORIUCHI Ryoko
井上 徹
INOUE Tetsuo
佐々木 孝雄
SASAKI Takao
萩原 愛理
HAGIWARA Ai
渡中 典
WATANABE Noriaki
本田 雅博
HONDA Masahiro
吉川 博樹
YOSHIKAWA Hiroki
渡邊 孝中
WATANABE Takanao

青木 尊 AOKI Takeru

1968年、福島県生まれ。富士山が連なるかのような不思議な山、強調された目の部分。青木の作品は、独自の視点で切り取られた迫力のある構図が、見ている者を惹き込む力をもっている。一方で、画面は、ペンや色鉛筆などをつかい筆触を重ねて丁寧に描き込まれており、勢いで描いたものではないことも感じさせる。描くモチーフは、子どもの頃に親しんだ昭和のスターやヒーロー(ダーク・ヒーロー)/ヒロインなど、青木が強く惹かれる人やイメージが多い。小学生の頃から描いていた青木の創作は、1997年に入所した施設での活動を通じて旺盛になった。溢れる創造力は、施設職員との交流をきっかけに多くの人が知るところとなり、後の「はじまりの美術館」(福島県)の開館へとつながっている。

主な出展歴は、「アール・ブリュットジャポネⅡ」(パリ市立アル・サン・ピエール美術館 [フランス・パリ] 2018-2019年)など多数。[M]

Born in 1968 in Fukushima prefecture. Wondrous ranges of Mt. Fuji-like mountains. Faces with pronounced eyes... Aoki's works display striking compositions captured from unique perspectives and possess a power to captivate the viewer. Still, they are drawn carefully with repeated strokes of a pen or colored pencil, and do not suggest a forceful hand. Prominent among his motifs are Showa-period stars and heroes (dark heroes) and heroines he knew in his childhood, and people and images that fascinated him in those days. Aoki has enjoyed drawing since his elementary school days, but he began to produce artworks prolifically as a result of art activities at the facility he entered in 1997. His overflowing creativity, which became widely known through facility staff who spent time with him, later contributed to the opening of the "Hajimari Art Center" (Fukushima prefecture). His main exhibitions include "Art Brut Japonais II" (Halle Saint Pierre [Paris, France] 2018-2019). [M]

I-I

レパス

1997-2004年頃

クレヨン、ボールペン、色画用紙(黒)

56.8×41.3

1-1

Repass

c. 1997-2004.

Crayon, Ballpoint pen, Colored Drawing paper (Black)

56.8×41.3





紅と白
2011年
油彩
150x100cm



黒猫
2011年
油彩
150x100cm



顔
2011年
油彩
150x100cm



顔
2011年
油彩
150x100cm



顔
2011年
油彩
150x100cm

五十嵐 朋之 IGARASHI Tomoyuki

1977年、東京都生まれ。刺繍やペン画、染め、折り布といった手法を駆使して、昆虫や魚貝、植物、建物、人物などのモチーフを描く。下描きなしの刺繍では、ペン画さながらの緻密さと即興性の伴う有機的な形を生み出す。描かれる図像のそばにはモチーフの名称や不思議な組み合わせの言葉が添えられ、五十嵐のユーモアあふれる世界観を静かに際立たせている。1996年よりクラフト工房 La Manoに所属し、2014年よりアトリエメンバーとして活動を開始。

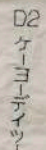
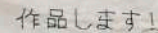
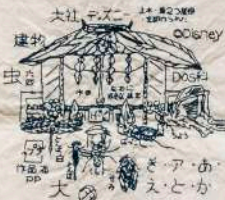
主な出展歴は、「日本のアール・ブリュット KOMOREBI展」(フランス国立現代芸術センターリュウ・ユニック[フランス・ナント]2017年)や個展「フェローアートギャラリー vol.13『五十嵐朋之のこれだけこだわり展』」(横浜市民ギャラリーあざみ野【神奈川県】2014年)、「五十嵐朋之刺繍世界昆虫魚貝植物建物」(ニジノネ【佐賀県】2019年)など多数。[K]

Born in 1977 in Tokyo. Igarashi depicts motifs such as insects, fish, shellfish, plants, and people using embroidery, pen drawing, dyeing, and fabric folding. Although embroidering without making a preparatory sketch, Igarashi depicts organic forms with the precision and spontaneity of a pen drawing. The names of motifs and odd combinations of words that accompany the icons he depicts quietly accentuate his humorous worldview. Igarashi has belonged to La Mano craft workshop since 1996, and began working as an atelier member in 2014. His main exhibitions include “Komorebi Art brut japonais” (Le Lieu Unique Center for Contemporary Culture [Nantes, France] 2017) and solo exhibitions “Fellow Art Gallery vol. 13, “Igarashi Tomoyuki no koredake kodawari” (Yokohama Civic Art Gallery Azamino [Kanagawa prefecture] 2014) and “Igarashi Tomoyuki shishu sekai konchu gyokai shokubutsu tatemono” (Nijinone [Saga prefecture] 2019). [K]

2-13
魚貝表
2014~2020年頃
綿糸(藍染)、綿糸、綿布/手刺繍
36×25.9

2-13
Fish and Shellfish Chart
c.2014-2020
Cotton yarn (Indigo dye), Cotton yarn, Cotton cloth/Hand embroidery
36×25.9





五十萬 圓之
(1148) 2011 年
10月 20日
10月 20日

五十嵐 康之
HARUHIRO Yamanashi
在職中ササノ 恭彦
Haruhiko Sasano

五十區 附之
THE FIFTY ZONES
李漢波主編
(Recommending Book)

五十嵐 聖之
HARAKAITSU Tsumonori
うす
聖之

五十年 頤之
大正十一年四月 頤之
大正十一年四月 頤之

五十篇 歌之
(1) 1000 (1000) 1000
續わたりしもの

五十嵐 聖之
HLL494 HLL 7 (shimizu)
《僕の故郷に、まへたふら

[illegible]

稲田 萌子 INADA Moeko

1985年、京都府生まれ。ゆったりとした独自のリズムで円を描く動作を繰り返し、光をつかまえたような柔らかな線の束を紡ぎ出す。主に色鉛筆を用いて、複数の色を混ぜ合わせて描かれる円環は、重なり合う色と色とが互いを引き立て合い、描かれず空洞となる部分に、まばゆい光を帯びている。均一で伸び伸びとしたストロークからは、描く動作そのものに内在する喜びが籠っているようだ。2003年よりクラフト工房 La Mano に所属。アトリエが始動した2006年からのメンバー。主な出展歴は、「日本のアール・ブリュット KOMOREBI 展」(フランス国立現代芸術センター リュー・ユニック [フランス・ナント] 2017年)、「Art Brut from Japan, Another Look」展 (アール・ブリュット・コレクション [スイス・ローザンヌ] 2018-2019年) や「Co-LAB #1,2,3」展より「#2 稲田萌子×国保幸宏 = $\sqrt{\text{Drawing}}$ 」(ボーダレス・アートミュージアム NO-MA [滋賀県] 2020年) など多数。[K]

Born in 1985 in Kyoto prefecture. With repeated circular motions and a distinctive, relaxed rhythm, Inada draws bundled soft lines that seem to catch the light. Her circle motif, drawn mainly with colored pencils, displays mixed overlapping colors that reinforce each other's luminosity. Portions of the paper left blank appear to emit bright light. Her strokes, uniformly free and unconstrained, seem animated by a joy inherent in the act of drawing. She has belonged to La Mano craft workshop since 2003. She has been an atelier member since 2006.

Her main exhibitions include “Komorebi Art brut japonais” (Le Lieu Unique Center for Contemporary Culture [Nantes, France] 2017), “Art Brut from Japan, Another Look” (Art Brut Collection [Lausanne, Switzerland] 2018-2019) and “Co-LAB #1,2,3 : #2 Inada Moeko × Kokubo Yukihiro = $\sqrt{\text{Drawing}}$ ” (Borderless Art Museum NO-MA [Shiga prefecture] 2020). [K]

3-2

無題

2021年 (2021.6.17)

色鉛筆、ボールペン、水彩紙

36.4×51.6

3-2

Untitled

2021.6.17

Colored pencil, Ballpoint pen, Drawing paper

36.4×51.6

3-5

無題

2021年 (2021.2.17)

色鉛筆、ボールペン、水彩紙

36.5×51.5

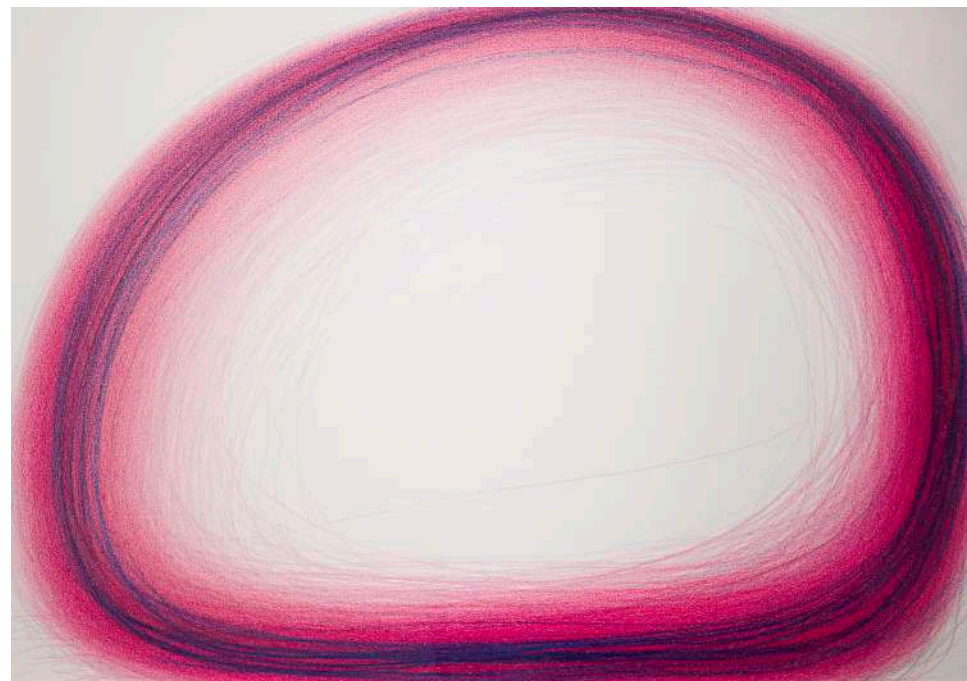
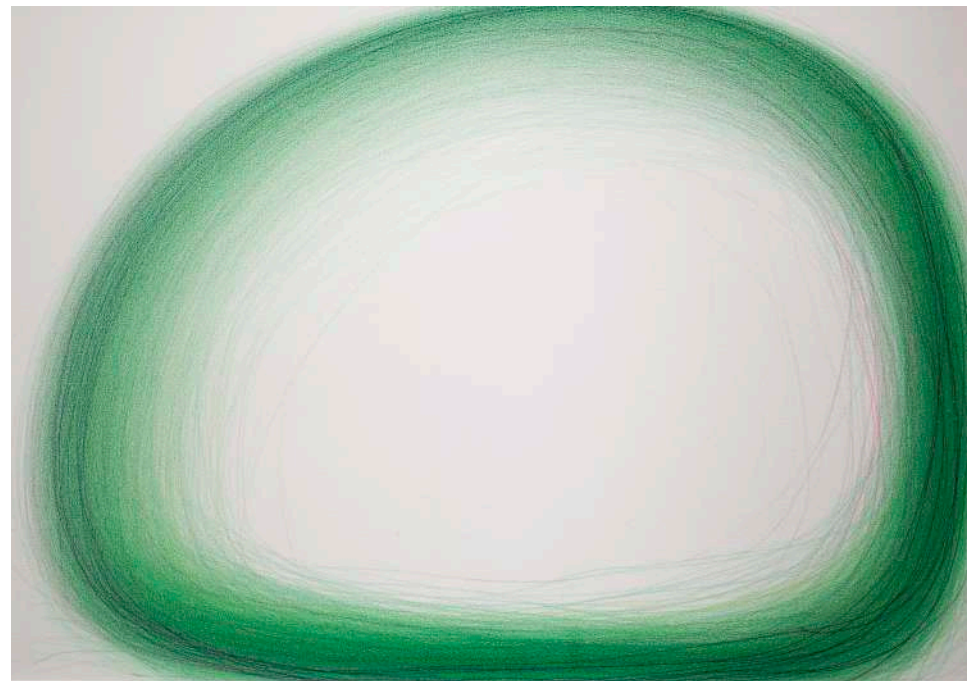
3-5

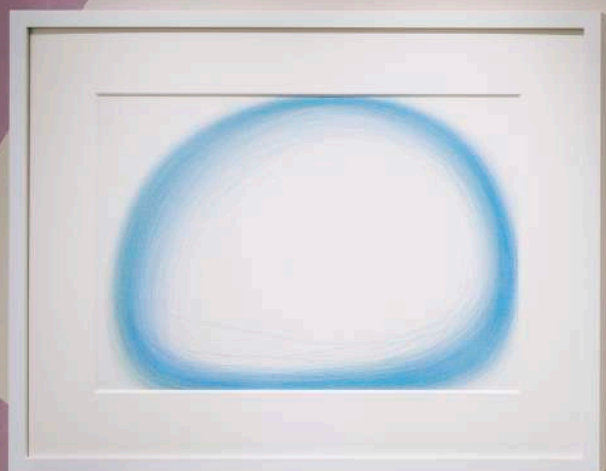
Untitled

2021.2.17

Colored pencil, Ballpoint pen, Drawing paper

36.5×51.5

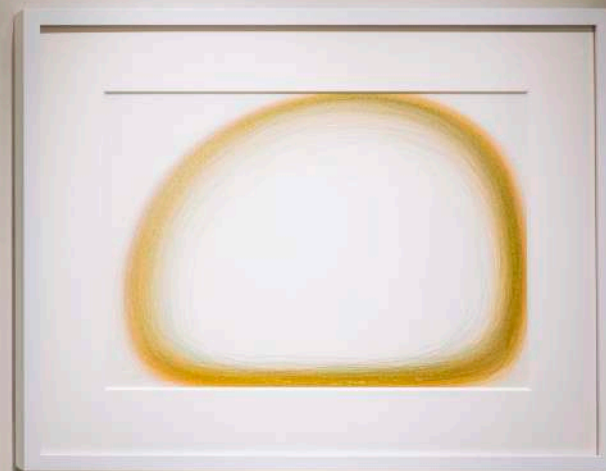




藍の光
2019年制作
紙、墨、水彩
150×150cm



緑の光
2019年制作
紙、墨、水彩
150×150cm



黄の光
2019年制作
紙、墨、水彩
150×150cm



井上 優 INOUE Masaru

1943年、滋賀県生まれ。大きな画面に、明確な線で描かれる人のかたち。さまざまなシーンで描かれる群像は、どの顔もやや無表情だが、どこか穏やかな印象で、作家自身の持つ雰囲気とよく似ている。鉛色に光るほど塗り込められた色面は、鉛筆の短い筆触を重ねて描かれている。1999年から「やまなみ工房」に所属する井上は、濃い(柔らかい)鉛筆と大きな紙という素材との出会いをきっかけに、70歳を超えてから本格的な創作活動をはじめたという。一日3時間の活動で、10Bの鉛筆を1本使い切り、絵の完成には10日間ほどかかる。

主な出展歴は、「アール・ブリュット ジャポネⅡ」(パリ市立アル・サン・ピエール美術館 [フランス・パリ] 2018-2019年)、「北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs」(北九州市美術館 [福岡県] 2021年)など多数。[M]

Born in 1943 in Shiga prefecture. Human figures—drawn in clear lines in a large picture. The figures, depicted in groups in various scenes, are all slightly expressionless but present a calm demeanor similar in mood to the artist himself. The color fields, filled so densely with colored pencil that they glow, are created by layering short pencil strokes. Inoue, who has belonged to Atelier Yamanami since 1999, began creating in earnest when over 70 years old after encountering his materials: dark (soft) pencils and large sheets of rolled paper. During three hours of daily work, he completely uses up a 10B pencil. Working in this way, it takes him about 10 days to complete a picture.

His main exhibitions include “Art Brut Japonais II” (Halle Saint Pierre [Paris, France] 2018-2019) and “ART for SDGs: Kitakyushu Art Festival Imagining Our Future” (Kitakyushu Municipal Museum of Art [Fukuoka prefecture] 2021). [M]

4-1

5人のかお

2014年

鉛筆、水彩紙

152×200

4-1

Face of five people

2014

Pencil, Watercolor paper

152×200

4-2

ダンス

2013年

鉛筆、水彩紙

152×200

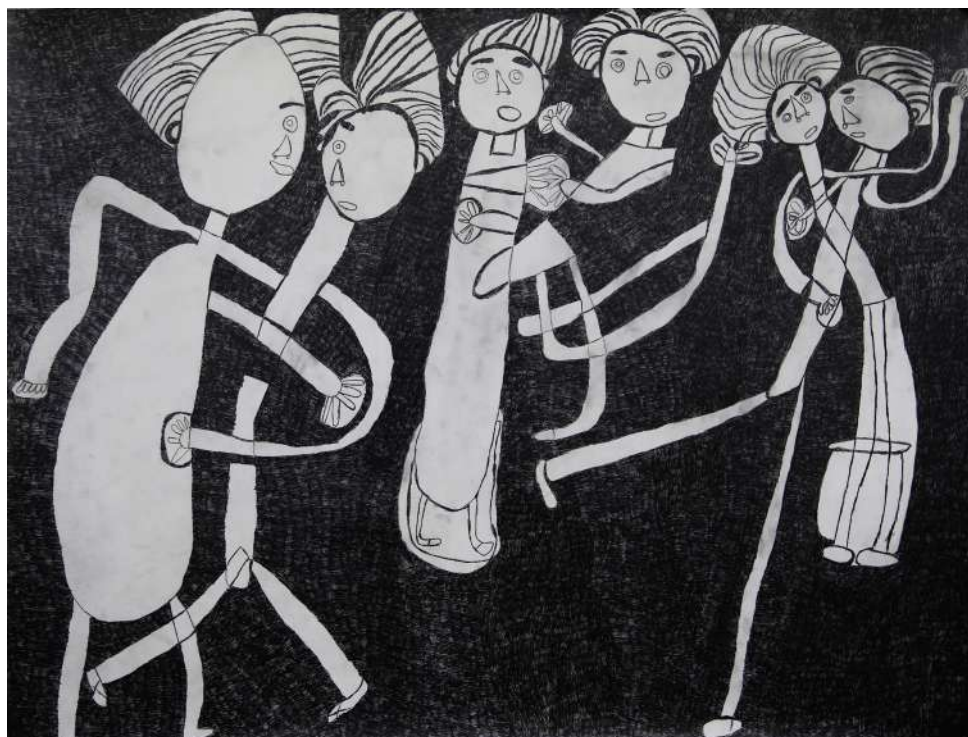
4-2

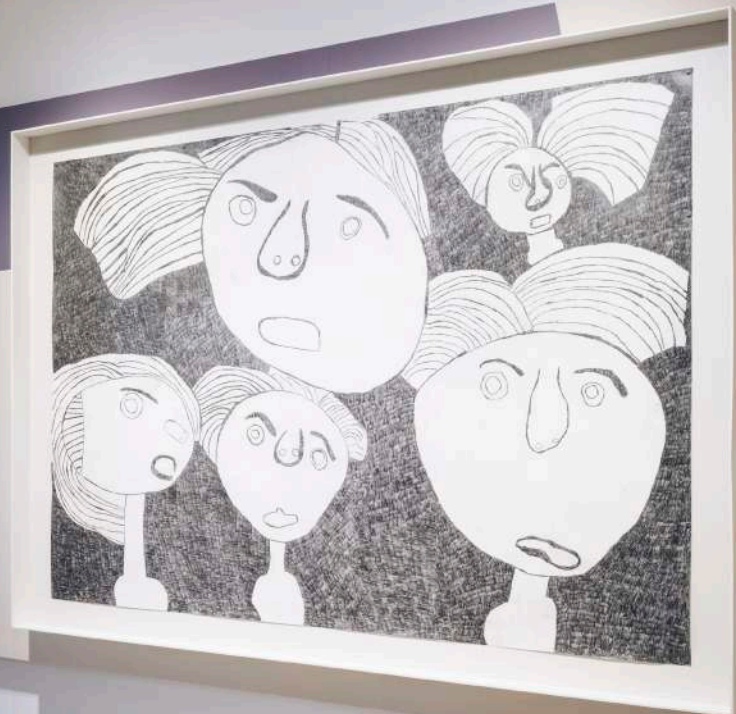
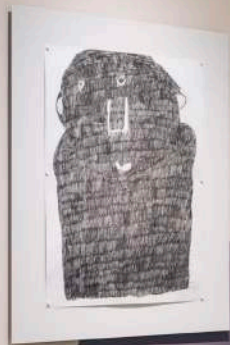
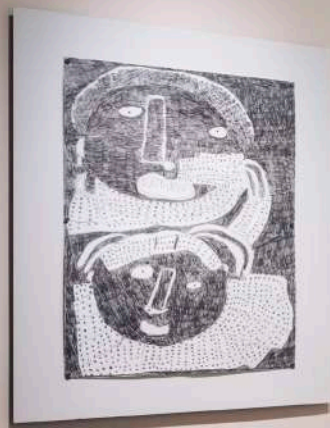
Dance

2013

Pencil, Watercolor paper

152×200





Small informational text or labels mounted on the wall to the right of the large artwork.



佐々木 早苗 SASAKI Sanae

1963年、岩手県生まれ。浮遊感のある独特の間合いで並ぶ、丸や四角の色面は、ボールペンやカラーペンのほか、刺繍による線の集積で描かれている。繰り返す筆致により紙や布が波打ち、画面に微妙なニュアンスを生じさせる。佐々木の表現は、誰かに見られることを意図したものではない。30代まで農作業に携わっていた佐々木は、1996年頃に習得したさをり織りをきっかけに、創意に満ちた表現者であることを周囲に発露した。るんびにい美術館の創作グループ「こころと色の工房まゆ〜ら」にて活動。刺繍やペン画など様々な手法に熱中しては次の表現へと移りながら今日まで創作が続いている。主な出展歴は、「アール・ブリュット ジャポネ」(パリ市立アル・サン・ピエール美術館 [フランス・パリ] 2010-2011年)、「日本とタイのアール・ブリュット―知られざる美のかたち―」(バンコク芸術文化センター [タイ王国・バンコク] 2019年)など多数。[M]

Born in 1963 in Iwate prefecture. Round and square color fields, seemingly floating in the space of the paper, are formed of concentrated lines drawn with a ballpoint pen or colored pen. The artist's repeated strokes create ripples in the paper, awakening subtle nuances in the picture. Sasaki's artworks are not created to be seen by others. After working in agriculture until her 30s, Sasaki revealed her artistic talents to people around her when she began learning saori weaving around 1996. She is active in the creative group "Kokoro to Iro no Kobo Mayura" at Lumbinii Art Museum. Through the years, her approach has been to fully immerse herself in a technique, such as embroidery or pen, then move on to a new form of expression.

Her main exhibitions include "Art Brut Japonais" (Halle Saint Pierre [Paris, France] 2010-2011) and "Thailand and Japan ART BRUT—Figure of Unknown Beauty" (Bangkok Art and Culture Centre [Bangkok, Kingdom of Thailand] 2019). [M]

5-4

無題

2012-2015年頃

ボールペン、紙

20.7×14.8

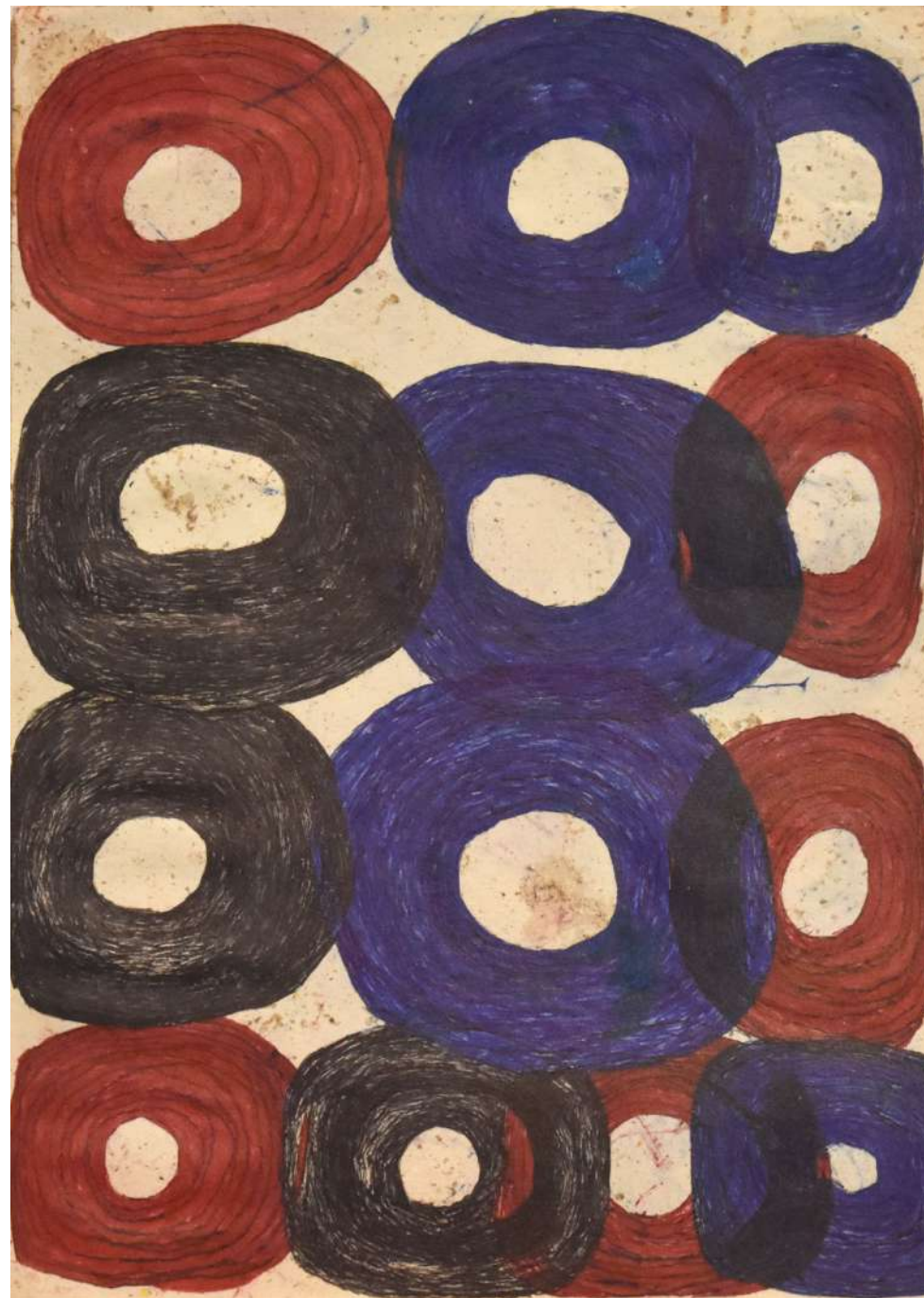
5-4

no title

c.2012-2015

Ballpoint pen, Paper

20.7×14.8





작가명
작품명
매체
제작연도



작가명
작품명
매체
제작연도



작가명
작품명
매체
제작연도



작가명
작품명
매체
제작연도



작가명
작품명
매체
제작연도



萩尾 俊雄 HAGIO Toshio

1987年、福岡県生まれ。鋭く尖った角や牙、鎧のように覆う突起。萩尾の立体は、厚手のチラシとセロハンテープを主な素材としてつくられる。特撮テレビ番組に登場する怪獣などに興味が、好きなキャラクターから着想したオリジナルの立体をつくり、戦わせて遊ぶ。幼児の頃、食卓の濡れた布巾をかたちづくることではじまった創作は、小学校低学年の頃には、紙へと素材を変え、つくり手の成長と共に細かく鋭い造形となり30年近く続いてきた。生活の一部としておこなわれてきた創作は、1日の内に2、3体を完成させることができるほど手早く軽やかだという。チラシは、色や柄の現れ方を意識しながら選んで用いている。

主な出展歴に、「これ、すなわち生きものなり」(ボーダレス・アートミュージアムNO-MA[滋賀県]2015年)、「アール・ブリュット展 想像を超える創造」(佐賀県立美術館[佐賀県]2015-2016年)などがある。[M]

Born in 1987 in Fukuoka prefecture. Sharply pointed horns and fangs, and armor-like protruding parts. Hagio's three-dimensional works are constructed primarily using flyers and cellophane tape. Motivated by his interest in monsters appearing in special effects TV programs, Hagio creates highly original three-dimensional objects inspired by his favorite characters and enjoys having them battle each other. His artistic practice, which began 30 years ago when shaping a wet cloth on the dining table as a toddler, shifted to paper as a medium in his younger elementary school years. With his growth as an artist, he has achieved sharp, precisely made form. Approaching production as a part of daily life, Hagio works quickly and nimbly, finishing two or three works in a single day. He selects flyers for use with attention to their colors or patterns.

His main exhibitions include "Kore, sunawachi ikimono nari" (Borderless Art Museum NO-MA [Shiga prefecture] 2015) and "Art Brut Exhibition Souzou wo koeru souzou" (Saga Prefectural Art Museum [Saga prefecture] 2015-2016). [M]

6-3
無題
2021年
チラシ、セロハンテープ
22.5×13×8/32g

6-3
Untitled
2021
Flyer, Cellophane tape
22.5×13×8/32g





濱中 徹 HAMANAKA Toru

1948年、兵庫県生まれ。高校卒業以降から制作を続け、2017年の「京都とっておきの芸術祭」への出展をきっかけに作品が注目される。主な題材にカエルや草花など身近な生物を描く。機械仕掛けや幾何学模様にも強い関心があり、昆虫や蝸牛をモチーフに空想上の機械や物語を創造し、紙上に落とし込む。はじめに、様々なかたちの定規やコンパスを組み合わせた下絵を、トレーシングペーパーに書き写す。そして、鉄筆で本番の紙に転写してから、色鉛筆や絵の具を用いて、1本1本の線を丁寧に浮かび上がらせていくことで、生き物や機械たちが生き生きと動き出すような濱中の世界観が生まれる。主な出展歴に、「道ばたで見つけた ちいさないきもの」(art space co-jin [京都府]、2018年)、「アール・ブリュットー 交差する物語ー」(ボーダレス・アートミュージアム NO-MA [滋賀県]、2020年)などがある。[Y]

Born in 1948 in Hyogo prefecture. Having actively created art since graduating from high school, Hamanaka in 2017 captured attention when exhibiting at the “Kyoto Totte-oki no Geijutsu-sai” art festival. Hamanaka depicts frogs, plants, and other familiar organisms as his principal subjects. He also has a keen interest in mechanical devices and geometric patterns, and depicts imaginary machines and stories on paper using motifs of insects and snails. He begins by making a preparatory drawing on tracing paper using a combination of rulers and compasses. Next, after transferring his image to paper using a stylus, Hamanaka draws each line carefully using colored pencil or paint, bringing to life a world in which creatures and machines move about in a lively manner. His main exhibitions include “Little creatures I Found at the Roadside” (art space co-jin [Kyoto prefecture] 2018) and “Art Brut — Kosa suru monogatari” (Borderless Art Museum NO-MA [Saga prefecture] 2020). [Y]

7-4
道端のちいさないきもの
2001年
水彩絵の具、鉛筆、水彩紙
31.8×32.1

7-4
Little Creatures at the Roadside
2001
Watercolor, Pencil, Watercolor paper
31.8×32.1





高中 卷
高中数学必修1、必修2
高中数学必修3
高中数学必修4
高中数学必修5
高中数学必修6
高中数学必修7
高中数学必修8
高中数学必修9
高中数学必修10
高中数学必修11
高中数学必修12
高中数学必修13
高中数学必修14
高中数学必修15
高中数学必修16
高中数学必修17
高中数学必修18
高中数学必修19
高中数学必修20
高中数学必修21
高中数学必修22
高中数学必修23
高中数学必修24
高中数学必修25
高中数学必修26
高中数学必修27
高中数学必修28
高中数学必修29
高中数学必修30
高中数学必修31
高中数学必修32
高中数学必修33
高中数学必修34
高中数学必修35
高中数学必修36
高中数学必修37
高中数学必修38
高中数学必修39
高中数学必修40
高中数学必修41
高中数学必修42
高中数学必修43
高中数学必修44
高中数学必修45
高中数学必修46
高中数学必修47
高中数学必修48
高中数学必修49
高中数学必修50
高中数学必修51
高中数学必修52
高中数学必修53
高中数学必修54
高中数学必修55
高中数学必修56
高中数学必修57
高中数学必修58
高中数学必修59
高中数学必修60
高中数学必修61
高中数学必修62
高中数学必修63
高中数学必修64
高中数学必修65
高中数学必修66
高中数学必修67
高中数学必修68
高中数学必修69
高中数学必修70
高中数学必修71
高中数学必修72
高中数学必修73
高中数学必修74
高中数学必修75
高中数学必修76
高中数学必修77
高中数学必修78
高中数学必修79
高中数学必修80
高中数学必修81
高中数学必修82
高中数学必修83
高中数学必修84
高中数学必修85
高中数学必修86
高中数学必修87
高中数学必修88
高中数学必修89
高中数学必修90
高中数学必修91
高中数学必修92
高中数学必修93
高中数学必修94
高中数学必修95
高中数学必修96
高中数学必修97
高中数学必修98
高中数学必修99
高中数学必修100



著者 関
 著者住所 東京都中央区
 本書題名(一) 関
 本書題名(二) 関
 著者生年 1911
 著者没年 1981
 著者職業 作家

[illegible]

张其成
 Zhang Qicheng (1952)
 张其成讲读《孟子》
 Zhang Qicheng on the Mencius
 张其成
 张其成讲读《孟子》
 张其成

本田 雅啓 HONDA Masaharu

1983年、福岡県生まれ。幼少期より好んで絵を描いていた本田は、家族の勧めで高校生の頃から絵画教室に通い、卒業後は、アートを仕事にする施設を活動の場として創作を続けてきた。野菜や昆虫、風景や物語のキャラクターなど様々なモチーフを、単純化した輪郭線と幾何学模様や色面を複雑に構成して描く。正確な筆致で、ライブペインティングを得意とし、建物の壁やシャッター、重機などにも描く。画風は、これまでに幾度か変化しており、現在では、テーマに合わせて描き分けるほどのバリエーションがある。近作では、物語に登場する複数のモチーフが複雑に組み込まれた作品を描いている。2018年からは、障害福祉サービス事業所PICFAにて活動。主な出展歴に、「すごいぞ、これは!」展(埼玉県立近代美術館 [埼玉県] 2015年)や、「関係するアート展」(佐賀県立博物館 [佐賀県] 2021-2022年)などがある。[M]

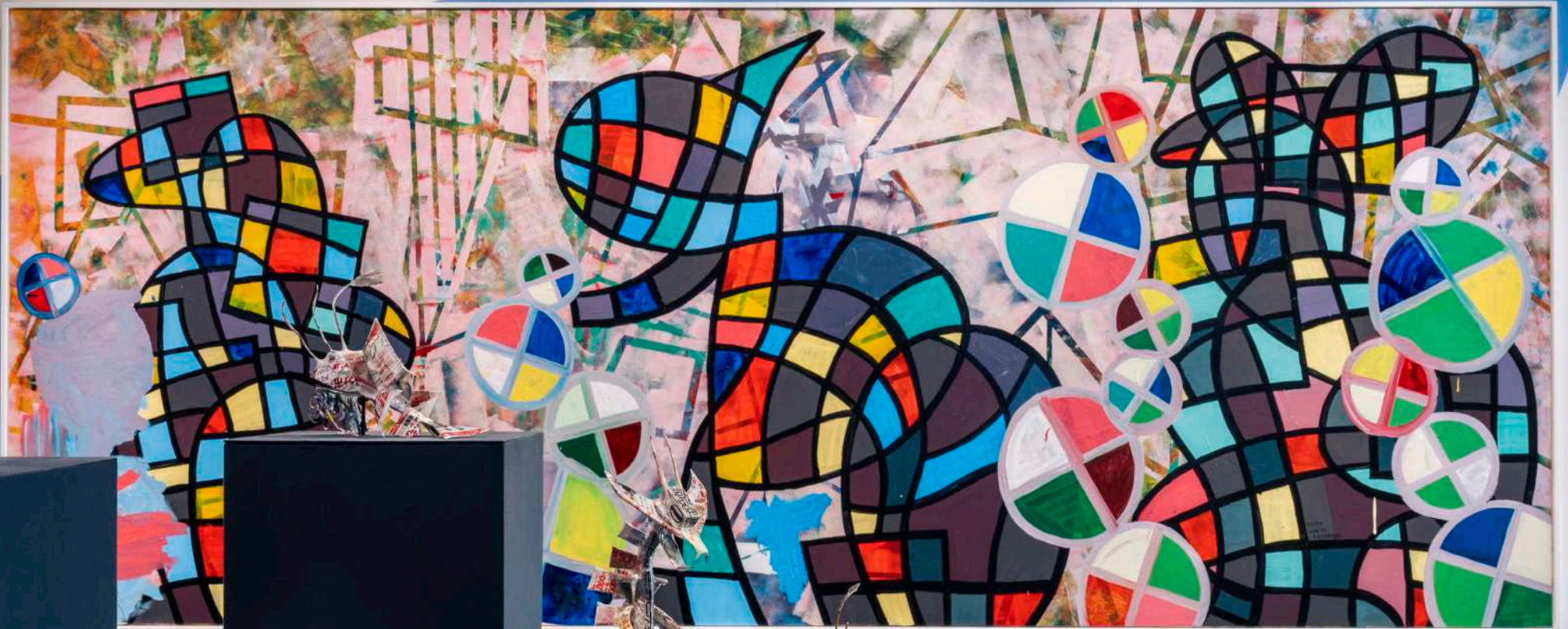
Born in 1983 in Fukuoka prefecture. Honda, who has enjoyed drawing and painting pictures since childhood, attended painting classes as a high school student at his family's encouragement. After graduating, he continued to paint at a facility devoted to art production. Honda complexly constructs simplified outlines, geometric patterns, and color fields to depict vegetables, insects, landscapes, narrative characters, and various other motifs. Known for live painting performances in which he paints with precise brushstrokes, he also paints on building walls, shutters, and heavy machinery. Honda's painting style has changed a number of times. He currently chooses from several variations to suit different themes. In recent works, he complexly interweaves the different motifs appearing in his narrative. Since 2018, he has worked at PICFA, a disability welfare service office.

His main exhibitions include "Sugoi zo, kore ha!" (The Museum of Modern Art, Saitama [Saitama prefecture] 2015) and "Relationship Art Exhibition" (Saga Prefectural Museum [Saga prefecture] 2021-2022). [M]

8-2
モモタロウ
2020年
アクリル 絵の具、水彩紙 (パネル)
65.2×53×2.5

8-2
MOMOTARO
2020
Acrylic paint, Watercolor paper (Panel)
65.2×53.1×2.5





吉川 秀昭 YOSHIKAWA Hideaki

1970年、滋賀県生まれ。模様のように見えるのは、顔のパーツの集合体だ。吉川の描くモチーフは一貫して、目、目、鼻、口。これを、独自のリズムで、平面や立体へ繰り返し描くスタイルで、30年以上もつくり続けている。鋭く削ぎ落とされた粘土の表面には、無数の目、目、鼻、口が、上部から下へ連なるように刻まれている。描き初めのパーツは大きく、描いているうちに小さくなるという。作品によっては髭が描かれる。紙にペンでくり返し描かれる顔は、画面全体の雰囲気と相まって、穏やかで多幸感にあふれた表情をしている。1988年より「やまなみ工房」に所属。

主な出展歴は、「アール・ブリュット『生の芸術』—その発見と未来」(京都文化博物館[京都府]1997年)、「アール・ブリュット ジャポネ」(パリ市立アル・サン・ピエール美術館[フランス・パリ]2010-2011年)、「eye eye nose mouth」(ハーバード大学アジアセンター[アメリカ合衆国・ケンブリッジ州]2019年)など多数。[M]

Born in 1970 in Shiga prefecture. What appears like a pattern is actually an aggregation of facial parts. Yoshikawa invariably depicts an “eye, eye, nose, mouth” motif. For more than 30 years he has explored this motif, working on flat surfaces and three-dimensional objects. On a sharply shaven clay surface, he carves countless “eye, eye, nose, mouth” facial parts in rows, from the top to bottom of the object. The parts are somewhat large at first, but as he works, they grow smaller. Beards appear in some of the works. The faces he repeatedly draws on paper display calm, joyful expressions that meld with the overall atmosphere of the picture. Yoshikawa joined Atelier Yamanami in 1988.

His main exhibitions include “Art Brut Ki no geijutsu—Sono hakken to mirai” (The Museum of Kyoto [Kyoto prefecture] 1997), “Art Brut Japonais” (Halle Saint Pierre [Paris, France] 2010-2011) and “eye eye nose mouth” (Harvard University Asian Center [Cambridge MA, United States] 2019). [M]

9-1

目・目・鼻・口

2017-2018年

陶土

24.5-36×6-11×5.5-9

9-1

Eye eye nose mouth

2017-2018

Clay

24.5-36×6-11×5.5-9





渡邊 あや WATANABE Aya

1987年、新潟県生まれ。修学旅行で沖縄へ行った経験から、後に飛行機を題材にした作品を描きはじめる。水性顔料ボールペンで枠線を描いた後、色鉛筆でパッチワークのように細かく分けて彩色する。2017年からは、アメリカやスペインなどの国を題材にした作品を制作。動物や建物、実在する航空会社のパロディなど、作品にちりばめられた遊び心が、見ている者を世界旅行へ誘う。2006年より、工房集に所属。

主な出展歴に、「第6回障害者アート企画展『Discoverあなたも見つけに』」(埼玉県立近代美術館[埼玉県]2015年)、「ポコラート全国公募展 vol.6」(アーツ千代田333I[東京都]2016年)、「現代アウトサイダーアートリアル-現代美術の先にあるもの-」(表参道GYRE Gallery[東京都]2019年)など、国内で発表を重ねている。[Y]

Born in 1987 in Niigata Prefecture. Watanabe began to paint works of airplane theme after her experience of flying to Okinawa on a school trip. Drawing an outline using a water-based pigment ballpoint pen, she divides it into small areas using colored pencil and colors them, creating a patchwork-like picture. Since 2017, she has produced works on the theme of countries such as the United States and Spain. Her playful spirit – seen in the countries' iconic animals and buildings, scattered about the picture along with parodies of actual airline companies—invite viewers to travel the world. Since 2006, she has belonged to Kobo-syu. Her main exhibitions include “6th Disability Art Exhibition ‘Discover Anata mo mitsuke ni’” (The Museum of Modern Art, Saitama [Saitama prefecture] 2015), “POCORART World Exhibition vol. 6” (333I Arts Chiyoda [Tokyo] 2016), “Contemporary Outsider Art REAL – What Comes Next for Contemporary Art? –” (GYRE GALLERY in Omotesando [Tokyo] 2019), and other exhibitions in Japan. [Y]

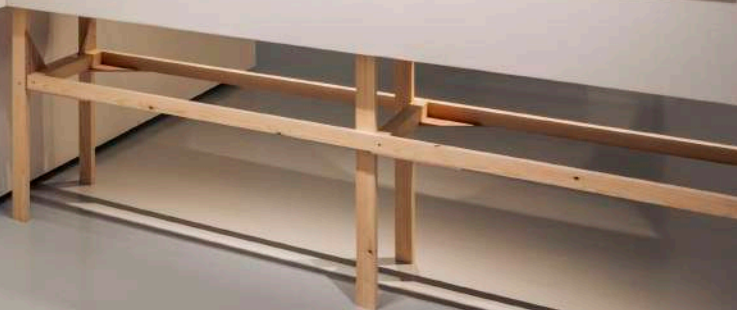
10-4
飛行機
2013年
ペン、色鉛筆、画用紙
77×108.5

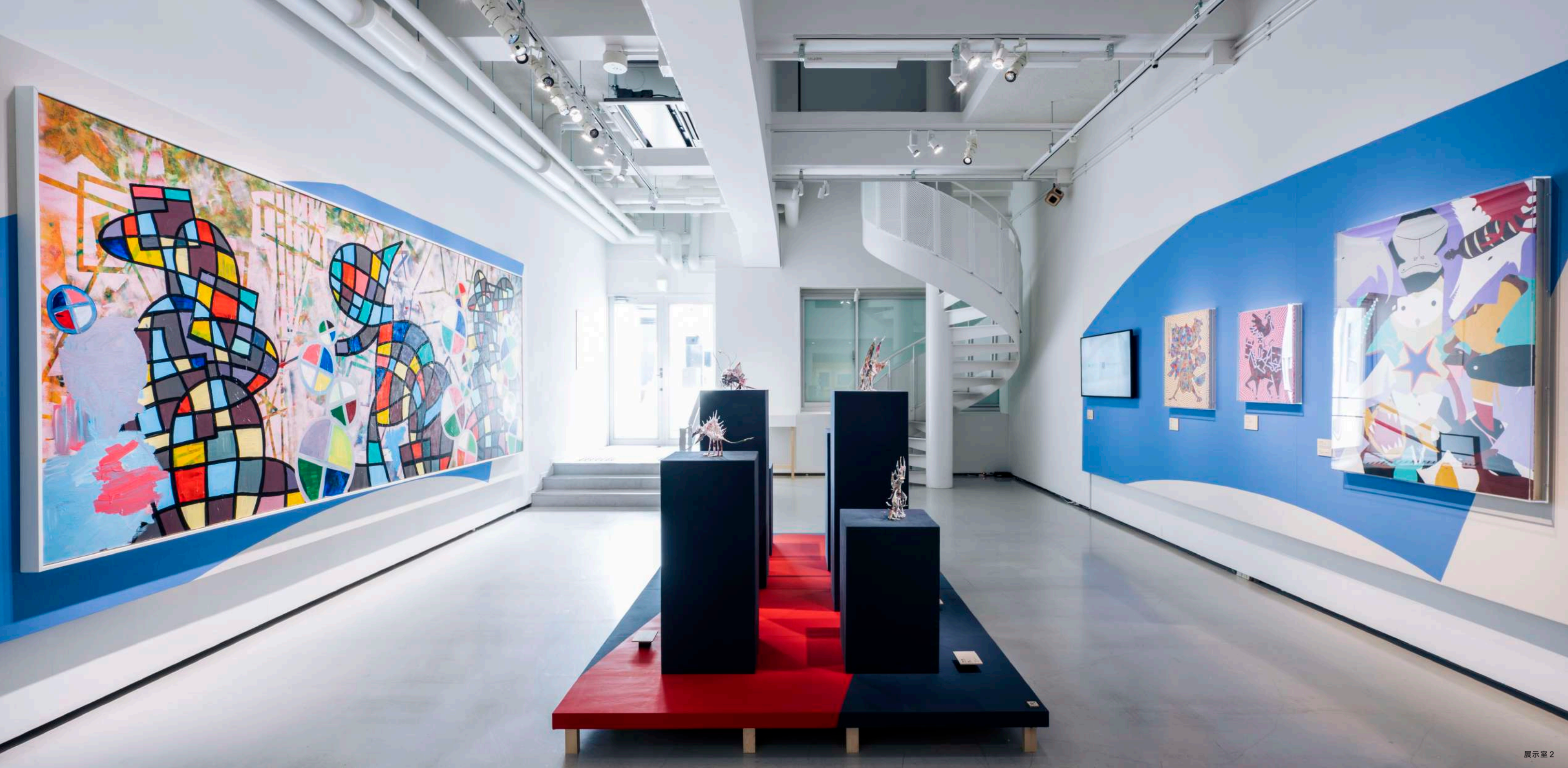
10-4
Airplane
2013
Pen, Colored pencil, Drawing paper
77×108.5

10-1
飛行機
2020年
ペン、色鉛筆、画用紙
54×77

10-1
Airplane
2020
Pen, Colored pencil, Drawing paper
54×77











藤田 敏子
ARTIST SEALS
藤田
1970-1980
ARTIST SEALS 101
藤田 敏子







出張イベント

アール・ブリュットってなんだろう&オンライン・ツアー

日時：8月2日(火) 13:30-14:30(開場13:00)

会場：八丈町多目的ホールおじゃれ

ナビゲーター：門あすか(東京都渋谷公園通りギャラリー)

リポーター：河原功也(東京都渋谷公園通りギャラリー)

中継：阪中隆文、小山友也

主催：東京都、

東京都渋谷公園通りギャラリー(公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館)

協力：八丈町

後援：八丈島文化協会

アール・ブリュット2022巡回展「かわるかたち」の出張イベントを八丈町で開催した。イベントの前半は、アール・ブリュットについて、展覧会の担当学芸員が画像を用いて紹介したほか、参加者と共に出展作家のひとりである吉川秀昭の作品(※展示作品とは異なる)を八丈町の会場で間近に鑑賞した。後半は、当ギャラリーの展示室と八丈町の会場とをオンラインでつなぎ、展示室の様子や展示作品を見ながら、展示室からレポートする学芸員の話聞いた。



展示室からのレポートの様子



八丈町の会場の様子

作品リスト

I 青木 尊

	作品名	制作年	素材 / 技法	サイズ	所蔵先
I-1	レパス	1997-2004年頃	クレヨン、ボールペン、色画用紙(黒)	56.8×41.3	
I-2	無題	1997-2004年頃	クレヨン、色鉛筆、ボールペン、色画用紙(黒)	56.6×39.6	
I-3	おぼけ	1997-2004年頃	油性ペン、水性ペン、クレヨン、色画用紙(赤)	19×27	
I-4	ネコ	1997-2004年頃	ボールペン、油性ペン、水性ペン、厚紙	30.5×44.3	
I-5	ウララちゃん	1997-2004年頃	水性ペン、ボールペン、クレヨン、修正液、厚紙	55.2×40.3	

2 五十嵐 朋之

2-1	昆虫ダンサー 巻き物表 白	2015年	ペン、ボールペン、修正液、和紙	19.4×496	
2-2	人間ダンサーシリーズ	2014-2015年頃	ペン、ボールペン、色鉛筆、 修正液、ポストカード	各14.8×10	
2-3 2-4 2-5	人間ダンサーシリーズ	2014-2015年頃	ペン、ボールペン、修正液、 ポストカード	各14.8×10	
2-6	シュンラン	2014-2020年頃	綿糸(藍染)、綿布／手刺繍	左)刺繍部分5.3×6.4 ／布28×44.2	
2-7	シロバナタンポポ	2014-2020年頃	綿糸(藍染)、綿布／手刺繍	右)刺繍部分4×5.8 ／布28×44.2	
2-8	フジ	2014-2020年頃	綿糸(藍染)、綿布／手刺繍	右)刺繍部分4.2×6.5 ／布28×43.8	
2-9	中沢池公園	2014-2020年頃	綿糸(藍染)、綿布／手刺繍	左)刺繍部分5×8 ／布28×43.8	
2-10	植物園	2014-2020年頃	綿糸、綿布(藍染)／手刺繍	33×64	
2-11	昆虫ダンサータオル	2016年頃	綿糸、綿布(藍染)／手刺繍	27.8×93.5	
2-12	大社ディズニー	2014-2020年頃	綿糸(藍染)、綿布／手刺繍	38×26.5	
2-13	魚貝表	2014-2020年頃	綿糸(藍染)、綿糸、綿布／手刺繍	36×25.9	
2-14	嫌われてしまったもの ・生物	2020年	綿糸(藍染)、ペン、綿布／手刺繍	60.2×70.2	
2-15	《嫌われてしまったもの ・生物》解説書	2020年	ボールペン、ルーズリーフ	29.7×21	
2-16	東京スカイツリー	2016 年	綿糸、綿布(藍染)／手刺繍	100.8×34	

3 稲田 萌子

3-1	無題	2019年(2019.9.3)	色鉛筆、水彩紙	36.3×51.5	
3-2	無題	2021年(2021.6.17)	色鉛筆、ボールペン、水彩紙	36.4×51.6	
3-3	無題	2022年(2022.2.1)	色鉛筆、水彩紙	36.3×51.4	
3-4	無題	2020年(2020.11.10)	色鉛筆、蛍光ペン、水彩紙	36.3×51.5	
3-5	無題	2021年(2021.2.17)	色鉛筆、ボールペン、水彩紙	36.5×51.5	
3-6	無題	2021年(2021.12.7)	色鉛筆、水彩紙	36.5×51.6	

4 井上 優

4-1	5人のかお	2014年	鉛筆、水彩紙	152×200	やまなみ工房蔵
4-2	ダンス	2013年	鉛筆、水彩紙	152×200	やまなみ工房蔵
4-3	女の人	2020年	鉛筆、マーカーペン、画用紙	76.7×54.5	やまなみ工房蔵
4-4	かお	2019年	鉛筆、画用紙	76.7×54.5	やまなみ工房蔵
4-5	ひと	2020年	鉛筆、画用紙	76.7×54.5	やまなみ工房蔵
4-6	かお	2019年	鉛筆、画用紙	76.7×54.5	やまなみ工房蔵
井上優の鉛筆			※関連資料		

5 佐々木 早苗

5-1	無題	1996年頃	糸(ミックス)/さをり織	29×372	作家蔵
5-2	無題	1998-2000年頃	ボールペン、紙	25×17.5	作家蔵
5-3	無題	2012-2015年頃	ボールペン、紙	20.7×14.8	作家蔵
5-4	無題	2012-2015年頃	ボールペン、紙	20.7×14.8	作家蔵
5-5	無題	2000-2004年頃	ボールペン(水性顔料)、画用紙	24.3×35.2	作家蔵
5-6	無題	2000-2004年頃	ボールペン(水性顔料)、 カラーボールペン、マーカーペン、紙	25×35	作家蔵
5-7	無題	2008-2012年頃	糸、布／手刺繍	25.8×16×厚み0.5程度	作家蔵

6 萩尾 俊雄

6-1	無題	2021年	チラシ、セロハンテープ	30×10×35／38g	作家蔵
6-2	無題	2021年	チラシ、厚紙、セロハンテープ、マーカーペン	28×12×27／61g	作家蔵
6-3	無題	2021年	チラシ、セロハンテープ	22.5×13×8／32g	作家蔵
6-4	無題	2021年	チラシ、セロハンテープ	18×8×37.5／32g	作家蔵
6-5	無題	2021年	チラシ、セロハンテープ	12.5×14×35.5／32g	作家蔵
6-6	無題	2021年	チラシ、セロハンテープ	28.5×32.5×12／32g	作家蔵

7 濱 中 徹

7-1	植物標本図	制作年不詳	アクリル絵の具、色画用紙	39.2×50.8	作家蔵
7-2	太陽系のハーモニー	制作年不詳	アクリル絵の具、 カラーイラストボード	51.5×36.4×厚み0.3	作家蔵
7-3	やがて雪が	2016-2017年頃	アクリル絵の具、 カラーイラストボード	36.3×36.3×厚み0.3	作家蔵
7-4	道端のちいさなもの	2001年	水彩絵の具、鉛筆、水彩紙	31.8×32.1	作家蔵
7-5	ブーメランカメラ	1997-1998年頃	水彩絵の具、鉛筆、 イラストボード	28.6×38×厚み0.3	作家蔵
7-6	蝸牛交信機	1998年	水彩絵の具、鉛筆、 イラストボード	346×424×厚み0.3	作家蔵

8 本田 雅 啓					
8-1	シブヤノマチナミ	2022年	ペンキ、キャンバス／共同制作	400×160.2×4.6	PICFA蔵
8-2	モモタロウ	2020年	アクリル絵の具、水彩紙(パネル)	65.2×53.1×2.5	PICFA蔵
8-3	ブレーメンノオンガクタイ	2021年	アクリル絵の具、水彩紙(パネル)	53×45.5×2.2	PICFA蔵
8-4	50days チャレンジ ドウブツノラクエン	2019年	アクリル絵の具、ペンキ、 水彩紙(パネル)	116.7×91.1×3.2	PICFA蔵
8-5	《50days チャレンジ ドウブツノラクエン》 制作記録	2021年	※資料映像	50秒	PICFA蔵
ドキュメンタリー・ムービー「シブヤノマチナミ」 2022年 17分40秒 出演：本田雅啓、原田啓之 他 クリエイティブディレクター：池田晶紀 編集ディレクター：菊池謙太郎 撮影：池田晶紀、菊池謙太郎、添田康平、池ノ谷侑花 撮影助手：道幸琴乃 音楽：大野真吾					

9 吉川 秀 昭					
9-1	目・目・鼻・口	2017-2018年	陶土	24.5-36×6-11×5.5-9	やまなみ工房蔵
9-2	かお	1995年	陶土	53.5×26.5×26.5	やまなみ工房蔵
9-3	目・目・鼻・口	2015年	マーカーペン、画用紙	38×54	やまなみ工房蔵
9-4	目・目・鼻・口	2020年	マーカーペン、画用紙	38×54.1	やまなみ工房蔵

10 渡 邊 あや					
10-1	飛行機	2020年	ペン、色鉛筆、画用紙	54×77	
10-2	飛行機	2021年	ペン、色鉛筆、画用紙	54×77	
10-3	飛行機	2021年	ペン、色鉛筆、画用紙	54×77	
10-4	飛行機	2013年	ペン、色鉛筆、画用紙	77×108.5	

- ・第1会場 全作品を展示 ※ただし、一部の作品は、前期(7月16日-8月21日)、後期(8月23日-9月25日)に分けて展示
- ・第2会場 1-1、1-2、2-1、2-11、3-4、3-5、3-6、4-3、4-4、5-2、5-3、5-4、5-7、6-3、6-4、6-6、7-1、7-2、7-3、7-4、8-2、8-3、9-1、10-4 の作品を展示
- ・第3会場 2-11、2-12、2-16、3-1、3-2、3-3、4-1、4-3、4-4、8-4、8-5 以外の作品を展示

【第1会場】関連イベント

学芸員によるギャラリートーク

展覧会担当学芸員による作品解説と、作家の制作にまつわるエピソードの紹介等を行った。

日時：7月22日(金)18:00-、9月3日(土)14:00-、9月17日(土)14:00- 各回30分

手話通訳：永井珠央、村山春佳、和田みさ

鑑賞会「みると話(わ)」

少人数のグループで展示室の作品を囲み、
会話を通して一人ひとりの心の動きを感じながら鑑賞した。

日時：8月8日(月)14:00-16:00、8月26日(金)18:30-20:30、9月9日(金)18:30-20:30

ナビゲーター：白鳥建二(全盲の美術鑑賞者/写真家)

進行：門あすか(東京都渋谷公園通りギャラリー)

手話通訳：村山春佳、和田みさ ※8月26日のみ

鑑賞ガイド

音声ガイド

出演：俳優 小関裕太 ※第1会場のみ

まめガイド

テキストによる作品解説とは別に、イラスト入りで
作家や作品にまつわるエピソードを紹介するガイドを、全会場にて配布した。



イラスト：パピヨン本田
デザイン：井上森人
テキスト・編集：河原功也、
竹野如花(東京都渋谷公園通りギャラリー)



プレイベント

本田まさはるさんと、 街ぶらライブペインティング

日時：2022年4月16日(土)、4月17日(日)
10:30-12:00/13:30-16:00

会場：東京都渋谷公園通りギャラリー 交流スペース

アーティスト：本田雅啓

ファシリテーター：原田啓之

撮影：池田晶紀、菊池謙太郎、添田康平、池ノ谷侑花、撮影助手：道幸琴乃

サポーター：宇田川純子、宇野澤昌樹

主催：東京都、東京都渋谷公園通りギャラリー（公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館）

スケジュール

公開制作 4月16日(土)13:30-16:00、17日(日)10:30-12:00、13:30-16:00

ワークショップ【散策】4月16日(土)10:30-12:00

【制作】4月16日(土)13:30-16:00、17日(日)10:30-12:00、13:30-16:00

本展覧会の開催に先駆け、出展作家のひとりである本田雅啓氏を招き、渋谷の街を歩いて見たこと感じたことを一般の参加者と共に描く公開制作／ワークショップを実施した。

第1会場と第3会場では、完成した作品《シブヤノマチナミ》と、制作の様子を記録した映像作品「ドキュメンタリームービー『シブヤノマチナミ』」を展示、第2会場では、映像作品のみを展示した。

関係者によるふりかえりトーク

本イベント（以下、「ライブペインティング」）のファシリテーターを務めた原田啓之氏（障害福祉サービス事業所PICFA施設長）と映像作品のディレクションを行った池田晶紀氏（写真家）による対談の内容を抜粋して掲載する*。〔対談日：2022年9月20日、聞き手：門あすか（東京都渋谷公園通りギャラリー）、書き起こし：宇野澤昌樹〕

（前略）

門：今回のライブペインティングでは、渋谷の街路を午前中に歩いて、その空気感と時間を共有して制作に臨むというのが特徴的だったと思います。池田さんには、全ておつきあいいただいて、全部をひっくるめて、また新しい作品に転換するという、ちょっと特殊なプロジェクトだったと思います

原田：今回はビルに囲まれた雑踏を歩くというのが正直どうか？と心配で。人もたくさんいるだろうし。本田さん、嫌だったらメチャクチャ歩くペースが速くなるんですよ。置き去りにしていくという(笑)。ただ、今回はそれがほとんどなかったんですよ。参加者に説明する時間も、近くにはいないけど、ちょっとみんなと離れたところで…

池田：待ってた？

原田：聴いてた。やっぱりここ20年で彼なりにすごく大人になった

池田：大人になった！高校生のときから見てるわけですからね

原田：そうそうそう。だから感謝の思いとか、「こうやって僕のために集まってくれてる」とか「みなさんのために僕はどう応えるべきか」みたいな。彼なりにたぶん考えて動いていたんじゃないかな。公開制作が2日間あったけど、人も入れ替わるなかでね、池田さんも見たとと思うけど、本田さんって無限に消えていくじゃないですか？



池田：うん

原田：どんな絵を描いても。小さい子が描いていても、どんどん消していって、最終的に自分が調整していくんだけど、やっぱり子どもがキャッキャッやってる時は離れて見てたりとかする瞬間もあって、もう本当に「ああ大人になったなあ」って思ってる。東京という場所がそうさせたのか。なんか価値観の交換みたいなことはやってるような雰囲気は感じた。僕という価値とあなたの価値をどう交換しようかな、みたいなことを本田さんなりに考えていたのかな

池田：この残し方²とか

原田：そうそうそうそう。テープの貼り方とかね。「どんなふうに貼ってもらう？」とか聞いたら、だいたい「まっすぐ貼ってください」とかだけど「なんでもいいです」って

池田：なんでも

原田：みたいな

池田：イメージを超えたいんだろうね。アクシデントを求めているんですよね。「アクシデントも含めたことがコラボレーションでしょ」みたいな

原田：うん

池田：対話の仕方は絵の人ですよ

原田：たぶん最終的に自分でどうにかできるという自信もあるから、そこがすごいにくいっていう(笑)

池田：まさにそうだよ

原田：そうじゃないと、最初に自分が描いた絵とか、塗りつぶさないもんね。本田さんはこれまで塗りつぶしてきているんだけど、毎回なんかしら、しっかり交換して残していつてところもね。「色変えます」って言って変えた時に、実は線を残してるとか

池田：だからけっこう冷静ですよ

原田：うん

池田：（他の人が描いた部分も）きれいだなと思ったところを残してるんですよ

原田：けどね、この残し方って20年で初めてなんですよ

池田：言っていました

原田：過去ライブペイント何回したかわかんないけど。これはもうびっくりした。絶対塗りつぶして、最終的にここにもってくるだろうと思ってたら「これでいいです」って言うから「うそー！」と(笑)。大人になったな、と。2日間、楽しかったと思います。新しい場所で、新しい空間で、今までにない街歩き。まあ、街歩きが、過去したことないかというところでもないけど、やっぱり建物ツアーもありつつ、グラフィティとか、トンネルくぐって駐輪場があってというところとかも、たぶん何か彼なりに感じることはあったんだろうな、と

あと、だいたいやっぱり空を見てたんだよね。建物を見ながら。通りを抜けたところでは必ず、空を見てて、ビルの中、縁を見ている

池田：なるほど。ビルの縁を見てたんだ

（後略）

1 対談の書き起こし全編は、後日、当ギャラリーのウェブサイトに掲載する。
2 p.7および図p.42-43参照。

Foreword

The Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery are pleased to present the Art Brut* 2022 Touring Exhibition, *Form, Fluid and Flexible*.

Held at three venues in Tokyo and as a special event on an island, this exhibition features 10 artists now expanding their field of activity in Japan and overseas. It examines the *katachi* (form) and fundamental creative charm of their diverse art expression, ranging from paintings to three-dimensional artworks, created using familiar everyday materials.

The Japanese word *katachi* (form) can mean appearance, shape, or design, or even the state of things. *Katachi* has many meanings, and its nuance in each case is expressed with a different Chinese character (〈形〉〈容〉〈象〉〈貌〉). This exhibition presents artworks that differ in form, in the many ways that *katachi* differs in meaning. The artists display special character in their handling of their motif—simple and strong repeatedly—drawn shapes, for example, or fine lines used in delicate drawings. Their works, in every case, are highly original.

Another feature of the exhibition is each work's deep connection with the artist's everyday life—the story of its creative process, the choice of what to draw and the materials to use. Creation and everyday life are inseparable, we are reminded.

We believe that through this exhibition, with Art Brut as a platform, new possibilities in art and culture and the questioning of humankind's fundamental desire for expression will emerge vividly and in multifaceted ways.

Finally, we would like to express our profound appreciation to the artists who have allowed us to exhibit their precious works and to everyone involved for their tremendous cooperation.

*Art Brut is a term originally proposed by French artist Jean Dubuffet. Today, it broadly refers to art that is notable for its unique ideas and means of expression, often created by artists who have not received a formal art education.

July 2022
The Organizers

Looking back at “Form, Fluid and Flexible”

MON Asuka (Curator, Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Introduction

This exhibition follows two special exhibitions¹ of Art Brut held by the Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery (hereafter “the Gallery”) in 2020 and 2021 with the aim of widely introducing Art Brut² in Tokyo. The exhibition, being held as of fiscal 2022 under the new series name “Art Brut Touring Exhibition,” began with a pre-event in April entitled “Live Painting by HONDA Masaharu.” Thereafter, the exhibition itself commenced from July at the Gallery, Nerima Art Museum Civic Art gallery, and Fuchu Art Museum Citizen's gallery, followed by a special event, “What is Art Brut? & Online Tour,” held in August in the island town of Hachijo, with the 2022 exhibition period wrapping up in December.

Featured were 10 artists active in Japan and abroad, among them artists invited in recent years to represent “Japanese Art Brut” at exhibitions overseas. With “form” and “change” as key words, the exhibition examined the fascination of seeing familiar everyday objects transformed by creators and the shift occurring within us as a result of encountering their artworks. To introduce Art Brut in the exhibition context, we configured the venue without assigning a route in order to create a place where visitors could approach all the works as contemporaneous artistic expression and look closely at each one.

Diversity from the Perspective of Form

Form is a word used on varying occasions in daily life. Not only can it mean an object's physical properties, such as figure, shape, or pattern, but it can also mean a conceptual understanding: the condition or state of a thing. Form is a word possessing widely varied nuances and, as such, it conjures up different images for different people. It was our expectation that, through encounters with many artworks, each viewer's image of the word's meaning would likely change.

When selecting artworks to display, we not only valued originality of form but also diversity among the artists in terms of production method, circumstances motivating their expression, and other background factors. To have viewers grasp the expressive breadth of Art Brut, a field where it is difficult to categorize artists by their production method or medium, we wanted to present as many examples as possible of each artist's work. As a result of our tracing each artist's development and the thoughts embodied in particular works, as we selected, an exhibition of truly diversified content emerged.

In this exhibition, works of widely varying shape and form could be seen, two-dimensional as well as three-dimensional works created using lead

pencil, colored pen, fabric, thread, flyers, and other everyday materials. The artists' tendency to select easily available materials and intimately familiar motifs is a special characteristic of Art Brut. Then also, some works did not arise from a creator's conscious intent, and artists also varied with regard to motive for taking up art, workplace, and exhibition history. Their private life was closely mirrored in their reason for choosing a medium and creating what they created. In every case, the work had acquired form as a product of the artist's thoughts and actions, and time invested in creation.

In their work, we see what we imagine to be a deeply personal reason for creating. Yet, why do we feel as if watching a universal event: people simply living their lives?

Each of the many forms; the changing gallery spaces

Here, I will discuss the 10 exhibiting artists, their works, and the exhibition space. Their works were displayed against a background of panels printed with the color fields composing the exhibition's main visual³. The color fields were also printed on the sides of display stands and cases. This was done as a device⁴ to impart a unifying image to the exhibition rooms for when the exhibition traveled to three different exhibition venues and to awaken a sense of collaboration between individual works and the overall venue. In our placement of artworks in the Gallery, which served as Venue I, furthermore, we gave attention to contrasts and a general sense of relatedness among them.

The Gallery's space was divided in two exhibition rooms, one large and one small. In the small room, a large, 4-meter canvas painting was mounted on one wall, and on the opposite wall, a monitor showing a video of the canvas being painted was mounted along with several paintings. Three-dimensional works were installed in the middle of the room⁵.

The canvas—a work by HONDA Masaharu depicting what he felt and saw while walking through Tokyo's Shibuya district—was painted in collaboration with participants at a live painting performance / workshop held as a pre-event in the Gallery's Interactive Space. The participants, some 80 people ranging from small children to adults, took turns drawing and painting while Honda, giving play their brushstrokes, layered the canvas with different colors of paint using brushes and rollers. Until now, although he did introduce the element of coincidence, Honda painted and overpainted according to his own rules, creating a world where lines and fields form an orderly structure of geometric patterns. This work, however, finds him leaving a large, irregular color field in the canvas's left extreme where a participant painted out the outlines of the motifs. By intentionally leaving this portion, which strikes us as disharmonious with the overall composition, he introduces an element that evokes Shibuya's atmosphere as a district developed through repeated scrap and build. The painting possesses reality because it born from a workshop gathering of people active in one place and one time.

A questionnaire, later distributed in the exhibition venue, drew comments praising the display of the completed painting with a video document⁶ enabling viewers to know the changing stages of its production. In contrast, HAGIO Toshio's art is refined by his thorough absorption in what is simply fun for him. Surprisingly, the monsters he continually creates in order to play with them and have them fight are made using only flyers and cellophane tape with no central support shaft. The monsters have a supple form as if captured in a moment of action.

Entry to the large room was arranged to have visitors pass through works by HAMANAKA Toru on their way into the room. Until coming to attention in the late 60s, Hamanaka had quietly created stories imagined from familiar everyday things using a unique method of his own. Seeing an insect in a steel nut found by the roadside or a cogwheel in the connected curves of a drawn flower, he imaginatively imparts life to forms living quietly in the space of a picture. Displayed next were the clay sculptures and pen drawings of YOSHIKAWA Hideaki, who has repetitiously depicted "eye, eye, nose, mouth" forms for more than 30 years. Although simple and monochrome, an astonishing amount of time is packed into Yoshikawa's works. On the opposite side of the wall from Hamanaka were WATANABE Aya's airplanes and motifs of names, famous city scenes, and other actually existing things, drawn using a unique patchwork approach. On the opposite side of the wall from Yoshikawa, meanwhile, the colored pencil drawings of INADA Moeko were hung. Watanabe's and Inada's colored pencil drawings were, thus, positioned next to each another. Beyond them was a section of embroidered pictures and pen drawings by IGARASHI Tomoyuki. In Igarashi's unique world, we fall absorbed in scenes of actual insects, observed in detail and skillfully depicted dancing hand in hand, and their accompanying delicately rendered kanji and kana characters. SASAKI Sanae also works in embroidery along with various other techniques. Whether in pen-drawn patterns or embroidery sketches, Sakaki uses short, repetitive strokes. INOUE Masaru too, after first drawing bold outlines, fills in color fields with short strokes of a pencil. Like Hamanaka, with whom he was displayed back-to-back this exhibition, Inoue draws attention with his age, having begun drawing in his 70s. In complete contrast with Hamanaka's art, however, Inoue's fascinates us with its boldness. The art of AOKI Takeru, displayed opposite of Inoue, also features bold compositions. Aoki's pictures, which depict in close-up his subject's features that particularly attract him, show us that expression of strong feelings can function as a technique for enhancing a picture's appeal. In contrast, the drawings of Inada, Sasaki, and Yoshikawa suggest that working toward a concrete end result is not the only approach to creation. For Inada, sensations pleasing to her, such as the feeling of her materials all blending as one, resultingly take form as a wondrous circle that only she can draw. This reminds us that art appreciation is not simply an act of deciphering what is depicted and why, but rather how we feel in front of the work is important.

Conclusion

As I have thus shown, the exhibition featured widely varied forms of expression, created with diverse motives by artists from varying regions. A further aspect, unique to a touring exhibition, was the way the works changed in impression in different venue layouts on their travels to the second and third venues. Many comments in the questionnaire referred concretely to aspects of the works that impressed them, with mention of artist and work name. The artist's particularity and emotions were a factor in each work's appeal, and recognition of this was reflected in viewers' responses. While naturally a feature of art in general, in Art Brut this factor provides an avenue for acknowledging and embracing differences of all kinds. We hope the Gallery's exhibition rooms will continue hereafter to be a resource for better living, where we can go anytime to experience art.

1 "Art Brut 2020 Special Exhibition, 'In a sky full of shining stars, unknown gems can be found. - To feel change and expansion in our universe.'" (2020) and "Art Brut 2021 Special Exhibition, 'Unframed - The limitless flight of creativity and imagination'" (2021). See the Gallery's website (<https://inclusion-art.jp/>) for the venue, exhibition period, and other details.

2 See p.74 in this catalogue.

3 See p.9. An image expressing the exhibition's concept, composed by removing only the overlapping portions of lines when the Japanese characters for *kawaru* ("change") and *katachi* ("form") are overlaid, then composing those portions as colorful color fields. (Design:10inc.). At each venue, the artworks interacted collaboratively with the color fields and changed in impression.

4 A system enabling flexible venue composition by assembling the panels using frame boards was proposed by FIGURE17-15 cas and nmstudio, who handled the venue composition.

5 See pp.52-54.

6 See p.81 in this catalogue for detailed credits for the documentary movie "Shibuya no Machinami."

List of Works

1 AOKI Takeru				Collection
	Title	Date	Material	Size
1-1	Repass	c. 1997-2004.	Crayon, Ballpoint pen, Colored Drawing paper (Black)	56.8×41.3
1-2	Untitled	c. 1997-2004.	Crayon, Colored pencil, Ballpoint pen, Colored Drawing paper (Black)	56.6×39.6
1-3	Ghost	c. 1997-2004.	Oil-based marker, Water-based marker, Crayon, Colored Drawing paper (Red)	19×27
1-4	Cat	c. 1997-2004.	Ballpoint pen, Oil-based marker, Water-based marker, Cardboard	30.5×44.3
1-5	Urara-chan	c. 1997-2004.	Water-based marker, Ballpoint pen, Crayon, Correction fluid, Cardboard	55.2×40.3

2 IGARASHI Tomoyuki				
2-1	Insect Dancers Scroll, List White	2015	Pen, Ballpoint pen, Correction fluid, Washi	19.4×496
2-2	Human Dancer Series	c. 2014-2015	Pen, Ballpoint pen, Colored pencil, Correction fluid, Postcard	14.8×10 (each)
2-3 2-4 2-5	Human Dancer Series	c. 2014-2015	Pen, Ballpoint pen, Correction fluid, Postcard	14.8×10 (each)
2-6	Noble Orchid	c.2014-2020	Cotton yarn (Indigo dye), Cotton cloth / Hand embroidery	Left) embroidery 5.3×6.4 / cloth 28×44.2
2-7	Traxacum albidum	c.2014-2020	Cotton yarn (Indigo dye), Cotton cloth / Hand embroidery	Right) embroidery 4×5.8 / cloth 28×44.2
2-8	Wisteria	c.2014-2020	Cotton yarn (Indigo dye), Cotton cloth / Hand embroidery	Right) embroidery 4.2×6.5 / cloth 28×43.8
2-9	Nakazawaike-Koen	c.2014-2020	Cotton yarn (Indigo dye), Cotton cloth / Hand embroidery	Left) embroidery 5×8 / cloth 28×43.8
2-10	Botanical garden	c.2014-2020	Cotton yarn, Cotton cloth (Indigo dye) / Hand embroidery	33×64
2-11	Insect Dancers Towel	c.2016	Cotton yarn, Cotton cloth (Indigo dye) / Hand embroidery	27.8×93.5
2-12	Disney Taisha Shrine	c.2014-2020	Cotton yarn (Indigo dye), Cotton cloth / Hand embroidery	38×26.5
2-13	Fish and Shellfish Chart	c.2014-2020	Cotton yarn (Indigo dye), Cotton yarn, Cotton cloth / Hand embroidery	36×25.9
2-14	Things Disliked: Creatures	2020	Cotton yarn (Indigo dye), Marker, Cotton cloth / Hand embroidery	60.2×70.2
2-15	<i>Things Disliked: Creatures Explanatory Guide</i>	2020	Ballpoint pen, Loose leaf	29.7×21
2-16	TOKYO SKYTREE	2016	Cotton yarn, Cotton cloth (Indigo dye) / Hand embroidery	100.8×34

3 INADA Moeko

3-1	Untitled	2019.9.3	Colored pencil, Drawing paper	36.3×51.5	
3-2	Untitled	2021.6.17	Colored pencil, Ballpoint pen, Drawing paper	36.4×51.6	
3-3	Untitled	2022.2.1	Colored pencil, Drawing paper	36.3×51.4	
3-4	Untitled	2020.11.10	Colored pencil, Highlighter, Drawing paper	36.3×51.5	
3-5	Untitled	2021.2.17	Colored pencil, Ballpoint pen, Drawing paper	36.5×51.5	
3-6	Untitled	2021.12.7	Colored pencil, Drawing paper	36.5×51.6	

4 INOUE Masaru

*Collection of Atelier Yamanami

4-1	Face of five people	2014	Pencil, Watercolor paper	152×200	*
4-2	Dance	2013	Pencil, Watercolor paper	152×200	*
4-3	Woman	2020	Pencil, Marker, Drawing paper	76.7×54.5	*
4-4	Face	2019	Pencil, Drawing paper	76.7×54.5	*
4-5	Human	2020	Pencil, Drawing paper	76.7×54.5	*
4-6	Face	2019	Pencil, Drawing paper	76.7×54.5	*
INOUE Masaru's Pencils					*

5 SASAKI Sanae

*Collection of the artist

5-1	no title	c.1996	Thread (Mix) / Saori-ori	29×372	*
5-2	no title	c.1998-2000	Ballpoint pen, Paper	25×17.5	*
5-3	no title	c.2012-2015	Ballpoint pen, Paper	20.7×14.8	*
5-4	no title	c.2012-2015	Ballpoint pen, Paper	20.7×14.8	*
5-5	no title	c.2000-2004	Ballpoint pen(Water-based pigment), Drawing paper	24.3×35.2	*
5-6	no title	c.2000-2004	Ballpoint pen(Water-based pigment), Colored ballpoint pen, Marker, Paper	25×35	*
5-7	no title	c. 2008-2012	Thread, Cloth/Hand embroidery	25.8×16×t0.5	*

6 HAGIO Toshio

*Collection of the artist

6-1	Untitled	2021	Flyer, Cellophane tape	30×10×35/38g	*
6-2	Untitled	2021	Flyer, Cardboard, Cellophane tape, Marker	28×12×27/61g	*
6-3	Untitled	2021	Flyer, Cellophane tape	22.5×13×8/32g	*
6-4	Untitled	2021	Flyer, Cellophane tape	18×8×37.5/32g	*
6-5	Untitled	2021	Flyer, Cellophane tape	12.5×14×35.5/32g	*
6-6	Untitled	2021	Flyer, Cellophane tape	28.5×32.5×12/32g	*

7 HAMANAKA Toru

*Collection of the artist

7-1	Plant Specimen	Date unknown	Acrylic paint, Colored Drawing paper	39.2×50.8	*
7-2	Harmony of solar system	Date unknown	Acrylic paint, Color illustration board	51.5×36.4×t0.3	*
7-3	It will snow soon	c.2016-2017	Acrylic paint, Color illustration board	36.3×36.3×t0.3	*
7-4	Little Creatures at the Roadside	2001	Watercolor, Pencil, Watercolor paper	31.8×32.1	*
7-5	Boomerang Camera	c.1997-1998	Watercolor, Pencil, Illustration board	28.6×38×t0.3	*
7-6	Cochlea Communication Machine	1998	Watercolor, Pencil, Illustration board	346×424×t0.3	*

8 HONDA Masaharu

*Collection(courtesy) of PICFA

8-1	Shibuya no machinami	2022	Paint, Canvas/Collaboration	400×160.2×4.6	*
8-2	MOMOTARO	2020	Acrylic paint, Watercolor paper (Panel)	65.2×53.1×2.5	*
8-3	The Bremen town musicians	2021	Acrylic paint, Watercolor paper (Panel)	53×45.5×2.2	*
8-4	50 Days Challenge Animal Paradise	2019	Acrylic paint, Paint, Paint Watercolor paper (Panel)	116.7×91.1×3.2	*
	<i>50 Days Challenge Documentary Video</i>	2021	-Reference Material(Video)-	50s	*

Documentary Movie "Shibuya no Machinami" 2022 17m 40s
 Cast. HONDA Masaharu, HARADA Hiroyuki, To all participants
 Creative Director : IKEDA Masanori Editorial Director : KIKUCHI Kentaro
 Photography/Videography : IKEDA Masanori, KIKUCHI Kentaro, SOEDA Kohei, IKENOYA Yuka,
 Assistant photographer : MICHIIYUKI Kotono Music by OHNO Shingo

9 YOSHIKAWA Hideaki

*Collection of Atelier Yamanami

9-1	Eye eye nose mouth	2017-2018	Clay	24.5-36×6-11×5.5-9	*
9-2	Face	1995	Clay	53.5×26.5×26.5	*
9-3	Eye eye nose mouth	2015	Marker, Drawing paper	38×54	*
9-4	Eye eye nose mouth	2020	Marker, Drawing paper	38×54.1	*

10 WATANABE Aya

10-1	Airplane	2020	Pen, Colored pencil, Drawing paper	54×77	
10-2	Airplane	2021	Pen, Colored pencil, Drawing paper	54×77	
10-3	Airplane	2021	Pen, Colored pencil, Drawing paper	54×77	
10-4	Airplane	2013	Pen, Colored pencil, Drawing paper	77×108.5	

Pre-event
Live Painting by HONDA Masaharu
— Event Report & Retrospective Talk by Staff

Date/Time: (Sat) 16 April and (Sun) 17 April 2022
10:30-12:00/13:30-16:00

As a pre-event to this exhibition, a live painting performance / workshop was held inviting HONDA Masaharu, one of the exhibiting artists, to paint in collaboration with participants what he saw and felt walking through Tokyo's Shibuya district. The completed canvas, *Shibuya no Machinami*, was displayed with a video work documenting the production process, "Documentary Movie *Shibuya no Machinami*," in Venues 1 and 3. The video documentary only was shown in Venue 2. This section features excerpts of a talk held with HARADA Hiroyuki (Director, PICFA disability welfare service office) and IKEDA Masanori (photographer) who handled art direction of the documentary movie¹. [Talk: September 20, 2022; Moderator: Mon Asuka (exhibition curator), Transcription: UNOZAWA Masaki]

(omitted)

Mon: The special feature of our live painting event this time was to walk through Shibuya in the morning and have everyone spend time together in that atmosphere, then undertake painting production. For Mr. Ikeda, who joined us throughout the entire event, capturing it all and making it into a new work, it was quite a special project, I think.

Harada: To be honest, I felt worried at first about our walking through crowds among the buildings. Masaharu walks at a terribly fast pace when he doesn't like the conditions. We get left behind (laughter). Yet almost nothing like that occurred this time. Even when I was explaining things to participants, he stood not close but just a little apart from everyone . . .

Ikeda: Waiting?

Harada: Listening. He has become quite an adult these 20 years.

Ikeda: He's become an adult! You've been watching him since high school, I think.

Harada: Right. So, he has thankful feelings, such as "Everyone has gathered like this for my sake" and "What is the best way for me to respond to everyone?" This kind of thing. The live production lasted two days, but with participants continually coming up to paint—and Mr. Ikeda was also watching this—it looked like he would forever keep erasing everything, don't you think?

Ikeda: Yes.

Harada: Whatever pictures they painted. Even pictures painted by small children, he steadily painted over everything, intending fix it up himself at end. But there was a moment when the children were noisily working away and he stood back and watched, and I really thought, "Ah, he's become an adult." Maybe Tokyo as a place had an influence. I sensed a mood as if he were seeking an exchange of values. My values and your values, how to exchange them. In his own way, Masaharu was maybe thinking this kind of thing.

Ikeda: Such as with this portion that he left².

Harada: Exactly. And the way the taping was done. When I asked him, "How should they tape it?" he usually answers, "Tape it straight, please." But he said, "Any way is fine."

Ikeda: Any way.

Harada: That kind of thing.

Ikeda: He was perhaps wanting to transcend the image. Seeking an accident. "Introducing an accident is what makes it a collaboration," this kind of thing.

Harada: Yes.

Ikeda: A painter's way of promoting a dialogue.

Harada: He also has confidence, knowing he can fix it up somehow in the end. He's so good, it's awful (laughter).

Ikeda: That's really true.

Harada: If not, he wouldn't paint over a picture he himself already painted. Masaharu has often used the painting-out method until now, but each time, he made sure to leave something in exchange. When changing something, he might say "I'll change the color," but he would in fact leave lines showing, for example.

Ikeda: We see that he's quite cool and calm.

Harada: Yes.

Ikeda: He also left a portion (painted out by someone else) that he thought looked pretty.

Harada: And yet this is the first time in 20 years I have seen him leave something like that.

Ikeda: That's what you said.

Harada: I don't know how many times we've done live painting before. I was very surprised. I felt sure he would finally put something new into the painted-out portion, but he said, "Okay, finished," and I thought, "You're kidding!" He's really become an adult. The two days were fun for him, I think. Taking a walk in a new place and new space, a town walk like never before. This is not to say he hasn't done town walks before, but this time, along with the architectural tour, we went through a tunnel and found graffiti and a bicycle parking lot. He probably felt something from it all, in his way.

Also, he generally was looking at the sky. While looking at buildings. Coming out of a street, he always looked at the sky, and he looked in buildings and at their structural lines.

Ikeda: So that's what. He was looking at the buildings' structural lines.

(omitted)

¹ A transcription of the talk will be provided on the Gallery's website at a later date.

² See p. 76 and illustrations on p. 42-43.

主要参考文献

『アール・ブリュット・ジャポネ』展カタログ、埼玉県立近代美術館他、現代企画室、2011年

『工房集コレクション 渡邊あや 作品集』社会福祉法人みぬま福祉会 川口太陽の家 工房集、2011年

保坂健二郎監修『アール・ブリュット アート 日本』平凡社、2013年

『いのち しるし 生命の徴 滋賀と「アール・ブリュット」』展カタログ、滋賀県立近代美術館、2015年

『これ、すなわち生きものなり』展カタログ、ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、2015年

『すごいぞ、これは!』展カタログ、埼玉県立近代美術館他、心揺さぶるアート事業実行委員会、2015年

中村政人『ボコラート宣言』333I Arts Chiyoda、2015年

『平成27年度文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業 アール・ブリュット魅力発信事業報告書
アール・ブリュットが繋ぐ』アール・ブリュット魅力発信実行委員会、2016年

『日本のアール・ブリュット KOMOREBI展』カタログ、フランス国立現代芸術センター リュー・ユニック、2017年

『ジャパン×ナントプロジェクトの全貌 障害者の文化芸術国際交流事業 2017
ジャパン×ナントプロジェクト|報告書|』文化庁、障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会、2018年

『日本のアール・ブリュット もうひとつの眼差し』展カタログ、アール・ブリュット・コレクション、
国書刊行会、2018年

『unico file vol.2 青木尊大物産展 〜青木さんとわたしの関係〜』カタログ、はじまりの美術館、2018年

小林瑞恵『アール・ブリュット 湧き上がる衝動の芸術』大和書房、2020年

『アール・ブリュット ー交差する物語ー』ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、
障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会、2020年

ART BRUT JAPONAIS, exh. Cat., HALLE SAINT PIERRE, Sitbon & Associés, 2010

ART BRUT JAPONAIS II, exh. Cat., HALLE SAINT PIERRE, Suisse Imprimerie: Paris, 2018

フォトクレジット Photo credit

撮影:ただ(ゆかい) [pp.10-II, 14-15, 17-19, 21-23, 26-27, 30-31, 33-35, 38-39, 42-43, 45-47, 50-63]
池ノ谷侑花(ゆかい) [pp.70-72]

画像提供: はじまりの美術館 [p.13]、やまなみ工房 [p.25]、るんびにいい美術館 [p.29]、アートと障害
のアーカイブ・京都 [p.37]、PICFA [p.41]、工房集 [p.49]

記載のない画像は、東京都渋谷公園通りギャラリーによる撮影

Photo: TADA(YUKAI) [pp.10-11, 14-15, 17-19, 21-23, 26-27, 30-31, 33-35, 38-39, 42-43, 45-47, 50-63]
IKENOYA Yuka(YUKAI) [pp.70-72]

Photo Courtesy: Hajimari Art Center [p.13], Atelier Yamanami [p.25], Lumbinii Museum [p.29],
The Kyoto Archive of Art by People with Disabilities [p.37], PICFA [p.41],
Kobo-syu [p.49]

All images without credit are taken by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.

アール・ブリュット 2022 巡回展

かわるかたち

いろいろな素材、さまざまな表現

Art Brut 2022 Touring Exhibition Form, Fluid and Flexible
Varied Materials, Diverse Expression

展覧会

企画・担当：門あすか（東京都渋谷公園通りギャラリー）

担当：河原功也、吉田有里（東京都渋谷公園通りギャラリー）

会場構成：HIGURE17-I5cas、nmstudio

デザイン：柿木原政広、内堀結友（I0inc.）

額装：株式会社テラ

広報物印刷：関東図書株式会社

広報：青木真希子、浅野百衣、上島瑠美（東京都渋谷公園通りギャラリー）

Exhibition

Curator: MON Asuka (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Curators: KAWAHARA Koya, YOSHIDA Yuri (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Exhibition Space Design: HIGURE17-15cas, nmstudio

Design: KAKINOKIHARA Masahiro, UCHIBORI Yuu (I0inc.)

Picture Framing: TERA inc.

Publication Printing: Kanto Tosho Co., Ltd

Press Officer: AOKI Makiko, ASANO Moe,
UESHIMA Rumi (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

カタログ

企画・執筆・編集：門あすか

執筆：河原功也、吉田有里

翻訳：ブライアン・アムスタッツ（アムスタッツ・コミュニケーションズ）[pp.1, 12-48, 74-78, 82-83]

デザイン・編集：柿木原政広、内堀結友（I0 inc.）

印刷：株式会社ライブアートブックス

発行：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

発行日：2023年2月

Catalogue

Planning, Texts, Editing: MON Asuka

Texts: KAWAHARA Koya, YOSHIDA Yuri

Translation: Brian AMSTUTZ (Brian Amstutz Communications) [pp.1, 12-48, 74-78, 82-83]

Design, Editing: KAKINOKIHARA Masahiro, UCHIBORI Yuu (I0inc.)

Printed by: LIVE Art Books Inc.

Published by: Tokyo Metropolitan Government,
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Publication Date: February 2023

Artwork ©The Artist

©2023 The Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture.

